日曜寺子屋家族塾の取り組み　1

古川　秀明

きっかけ

公立の小中学校でスクールカウンセラーを始めて 17 年になる。

その間たくさんの家族面接をしてきた。一番多いのは不登校や非行の相談。その中で「勉強」のことがよく話題になった。

不登校や非行で学校に行かないと勉強が遅れ、進学にも影響が出る。不登校の子には、外に出られない子も多いので塾にも行かない。かといって家庭教師も拒否する。通信講座も手付かずのままお金だけ取られる。

子どもが中学３年の受験生なら、なおさら親は焦る。我が家はあまりお金もないので、できれば学費の安い公立へ行って欲しい。しかし、不登校や非行で内申点も付かず、今の状態では偏差値を上げるどころか、偏差値の測定さえままならない。そんな状態なのに子どもは全く勉強しようとしない。

このままでは将来が不安だ。大学を出ても就職難の時代に、高校進学さえも危ぶまれる我が子はいったいどうなるのか・・・。

不登校や非行の他に、小学校の低学年からチックや腹痛などの神経症症状を訴える子どもの相談も多い。

家族や友達の問題もあるのだが、案外多いのが「勉強」だ。有名私立中学へ入れるべく奮闘する親と、それに必死で応える子ども。睡眠時間以外はほとんど勉強。そんな親御さんの望みは、「勉強時間は削らずにチックだけ治して欲しい・・・」。

このように、勉強させたいという親の押し付けを、子どもは様々な症状で抵抗する。症状はどうあれ、勉強を拒否する子ども達が、一発で親を黙らせるセリフがある。

それは、「なんで勉強せなあかんの？」である。子どもにこれを言われると、たいがいの親は一瞬黙る。
しかし、親も負けていない。すぐに様々なパターンで反撃に出る。

パターン１＜お受験ドミノ倒し攻撃＞

「ええか、よう聞きや。今勉強しといたらええ中学校に入れるねん。そこでもがんばったらええ高校に入れるねん。そこでもがんばったらええ大学に入れて、ええ会社に入れて、あんたは幸せになれるんやで」

パターン２＜愛情押し付け攻撃＞

「あんたのために言うてるんやで、あんたが将来困らんように今勉強せなあかんねん。あんたのことを思うて言うてることやねんで。こんなにあんたを思っているお母ちゃんの気持ち、いっぺんお腹切って見せてあげたいわ」

パターン３＜比較攻撃＞

「Ａ君は～中学を目指してはるんやで。あんたＡ君に負けてもええのんか？」

「Ｂ君のお兄ちゃんは高校も行かんと引きこもってはるらしいで。あんたもそんななりたいか？」
「お父ちゃんみたいに安い給料でもええのんか！」
「弟より成績悪いやん。あんたお兄ちゃんとして恥ずかしないんか！」

パターン４＜世間体攻撃＞
「ええか、大きい声では言えへんけどな、なんやかんや言うても、世間の人は学歴を見るんやで。就職するときも、雇い主はまず履歴書の学歴を見るんや。中学卒業の人と大学卒業の人がいたら、絶対大学卒業してる人が選ばれるんやで」
「口ではみんな学歴なんかどうでもええて言うてるけど、ほんまはしょうもない学校しか出てない人をバカにしてはんねんで」

パターン５＜突き放し攻撃＞
「もうええ！もうわかった！そんなに勉強したくなかったら勝手にしよし。もう今日からあんたの世話なんかせぇへん！あんたのご飯も作らへんしな！」

パターン６＜褒め殺し攻撃＞
「ほんまにあんたはお母ちゃんの宝物や。あんたがいるからお母ちゃん生きてるようなもんやで。あんたやったら絶対あの中学入れるから。大丈夫や。お母ちゃんがついてるよ」

パターン７＜泣き脅し攻撃＞
「うわ～ん、うわ～ん、うわ～ん」

パターン８＜鬱病攻撃＞
「もうええよ。みんなお母ちゃんが悪いねん。もうお母ちゃんなんか生きてる値打ちなんかないねん。死んだほうがええねん。今までごめんな。お母ちゃんが死んだらもう勉強でうるさくいう人はいいひんから・・・。（今にも死にそうなか細い声で）ちょっとそこの心療内科でもらったお薬取って～」

パターン９＜収賄攻撃＞
「もしあんたががんばってあの学校入れたら、あんたが欲しがってるスマホ買うたげるから・・・。ウィーでもプレステでも買うたげるから・・・」

パターン１０＜家出攻撃＞
「お母ちゃんはあんたが勉強するようになるまで家には帰りません。探さないで下さい。行き先は東尋坊方面です」（東尋坊・・・自殺の名所）

パターン１１＜虐待攻撃＞
「こんな問題もわからへんのか！（バシッ）」
「お前はアホか！何回ゆうたら覚えるんや！（バコッ）」
「何でこの前教えたこと忘れるんや！（バシッ）」→顔をしばかれて鼻血を出す
「なに鼻血出しとるんじゃ（ボコッ）」
「通告されるから誰にも言うなよ！（髪の毛を引っ張る）

パターン１２＜お金に換算攻撃＞

「あんなに高い月謝払って塾行かせてこんな成績かいなほんまに！あほらしいわ。金返して欲しいわ」

「何が（公文にいくもん）や！（公文なんかにいくもんか）！や」

「あ～、高い月謝払って家庭教師頼んでるのにこの成績か！、月謝をドブに捨てたんと同じやな」

パターン１３＜知り合い動員攻撃＞

「お前、もうちょっとお母ちゃんの気持ちわかったれよ。おっちゃんはお前のお母ちゃんの苦労がようわかんねん」

「おばちゃん悲しいわ・・・。あんたのお母ちゃんがどんなにあんたのこと可愛がってはるか、おばちゃんようよう知ってんねん。そやし、おばちゃんのためにもがんばって勉強して！」

パターン１４＜問答無用攻撃＞

「じゃかましい！ええから黙って勉強しなさい！」

パターン１５＜長時間偉人伝攻撃＞

「昔、二ノ宮金次郎てゆう人がいてな・・・(延々３０分)」

＋

「中国の偉い人に孔子てゆう人がいてな・・・(延々３０分)」

＋

「野口英世とゆう人は小さい時にやけどしていじめられても・・・(延々３０分)」

パターン１６＜自分の苦労攻撃＞

「お父ちゃんは子どもの時貧乏で、高校行きたかったけど行けへんかったんや。それから学歴で苦労してなぁ・・・。そやからお前にはどうしても大学まで行って欲しいんや」

これらの攻撃は単独で使われる場合もあれば、いくつかを組み合わせて使われる場合もある。

これらはほんの一例にすぎない。他にも子どもに勉強させるための攻撃方法がたくさんある。恐らく勉強をさせようとする親の数と同じ数だけあるだろう。

これらの親の勉強攻撃に、子ども達はどこかしらけている。小学校の低学年までは親の強制力が機能する。しかし、年齢を重ねるにつれ、また、親の押し付けが激しくなるにつれ、「なんで勉強せなあかんの？」の一言は光を放ち、勉強させようとする親のわき腹に一瞬のボディーブローを加える。

それは何故なのだろう・・・。

（続く・・・）

日曜寺子屋家族塾の取り組み　2

古川　秀明

勉強アレルギー

スクールカウンセラーをしていて、勉強に関する親の相談では「どうすれば子どもが勉強するようになりますか？」あるいは「どうしたら子どもの勉強嫌いが治りますか」ということが一番多い。

勉強に関する子どもの相談では「毎日勉強しろという親がうっとうしい」ということが一番多い。

両者の話を聞いていると、小学校の高学年あたりから「勉強」という言葉を聞いただけで拒否反応を示す子どもと、なんとか勉強させたいと思う親のイタチごっこが繰り返されていることがよくわかる。

親の側の言い分としては子どもが勉強するのは当たり前で、勉強をするように我が子に言うのは親の愛情でもあるので、わが子の将来を考えても間違ったことは言っていないということだ。

子どもに向けられるその言葉には、子どもに有無を言わせぬ迫力がある。なぜなら、「子どもに勉強させることは親として正しいことをしているのだ」という確信があるからである。

自分は正しいことを言っているという自信のある人は持論を曲げない。なぜなら、正しいことを言っているからである。しかも相手はわが子なので反論の余地を与えない。

一方、子ども側はこの問答無用の親の押し付けに理屈では勝てないので＜拒否反応＞という形で抵抗する。

勉強をさせたい親と拒否反応を示す子ども、双方の話を聞いていると、共通する２つの特徴があった。

ひとつ目は「親が子どもに勉強を教えていた時がある」ということ。そして二つ目は「親も子も勉強をする意味を理解していない」ということだ

「親が子どもに勉強を教えていた時期がある」

塾や家庭教師、通信添削講座など、勉強に関するメニューをいくら並べても成績の上がらないわが子を見て、自ら子どもに勉強を教え始める親は多い。

子どもが小さいうちはまだ親の言うことを聞くし、高い月謝を払わなくても済む。しかし、ここに大きな落とし穴がある。

それは、＜親が子どもに勉強を教える行為は虐待の入口になる＞ということだ。

塾の講師や家庭教師が辛抱強く教えられるのは、赤の他人であるということと、報酬をもらっているからだ。

少々腹が立つことがあってもお金を支払ってくれるお客さんであるので辛抱できる。

成績が悪くても、その子の人生まで責任を負う義務もない。

しかし、親はそうはいかない。

他人の子のバカさ加減は笑って許せても、わが子のバカさ加減は許せない。

他人の子には「いいのよ、こんな計算出来なくても、今は電卓もあるんだから」と寛大な言葉を贈るが、わが子には「あんたこんな簡単な計算もできないの！もういっぺん幼稚園からやり直しなさい！」と容赦のない言葉を投げつける。

この年齢でこんなことも分からないのでは将来どうなるのか・・・という不安が余計に親をイライラさせる。イライラした親は子どもをきつく叱る。

塾や家庭教師なら、子どもは勉強しているフリをしたり、他のことを考えていたりと、適当に息を抜くこともできる。

しかし、親とマンツーマンの状況では許されない。わが子の集中力の低下を親は見逃さないし、許さない。

親にきつく叱られると余計に子どもの集中力は低下する。勉強よりも親に叱られることの恐怖に心が奪われからだ。

そうなると親のイライラはますます激しくなる。家事やパートで忙しい時間をなんとかやりくりして勉強に付き合っているのに、ちっとも勉強にやる気の出ないわが子を見ているとつい怒鳴ったり叩いたりしてしまう。

子どもに勉強を教える妻に夫が報酬を支払うということはない。つまり塾や家庭教師のように、教える側のメンタルヘルスを守る「報酬と時間」という枠組みもない。

そうなると、親と子の勉強の時間が、親にとってはイライラの、子どもにとっては恐怖の時間になってしまう。

甘やかされていたり、親よりも子どもにパワーのある場合、子どもは泣いたり、癇癪を起したりしてその状況から逃れることもできるが、勉強の時間が親子ともに苦痛であることに変わりない。

年齢を問わず、人は苦痛なことから逃れようとする。

親が子どもに勉強を教えるという行為は想像以上にエネルギーを使うので、何かと忙しい親が先に根負けすることが多い。

根負けした親はあわてて家庭教師や塾を探すが、一度勉強に悪い印象を持った子

どもにやる気を持たせるのは難しい。

もちろん、親の言うことを素直に聞いて過酷な勉強を続ける子どももいる。

そんな子どもは世間からの評価も高い。「お宅のお子さんは素直に勉強してうらやましいわぁ・・・」なんてことを聞くと、教える親もうれしかったりする。
ただ、そんな子ども達の面接をすると、本当は逃げ出したくてしょうがなかったり、チックやパニック症状、他者への暴力行為などの症状を出す子が多い。

「親子とも勉強をする意味を理解していない」

年齢を問わず、人は意味の分からない行動を続けることは苦痛である。
囚人がシャベルで大きな穴を毎日掘らされて、掘れたらまたそれを埋めさせられるようなものだ。

親はその人生経験から、学力や学歴が高い方が生きて行くのに有利だということを理解している。前述した１から１６の強制勉強攻撃の言動はどれもその表れでもある。

突き詰めれば、「生きて行くには、食べて行くには、勉強が一番役に立つのだからとにかく勉強しなさい」ということである。

学歴神話や終身雇用がしっかりと機能していた時代なら、その考え方はある程度説得力もあった。

親が勉強や学歴で苦労した経験がある場合、その説得は迫力もある。

そういう考え方が社会の主流でもあったので、自分の周りの先輩や友達も理屈抜きでその方向へと流れて行く。

そして大人になって振り返った時、子どもの時に親が無理やりにでも勉強させてくれたおかげで、自分はここまで来れた・・・とか、親が苦労をして私を学校に行かせてくれた・・・という感謝の気持ちも湧いてくる。

昨年度（２０１２年）ＮＨＫの紅白歌合戦で三輪明宏さんが歌った「ヨイトマケの唄」はそのことをよく表している。中高年の人がこの唄に共感し、感動するのは「親の愛情」「子どもの孝行」「学歴神話」が、いかに日本社会に定着していたかの表れでもあろう。

貧乏な家庭に育ち、「ヨイトマケの子ども、汚い子ども！」といじめられた子どもが、「子どものためならエンヤコラ～」と自分の為に働く母親の姿を見て学問を志す。

大人になり、「高校も出たし、大学も出た。今じゃ機械の世の中で、おまけに僕はエンジニア」と、自分の人生の成功の陰に母親の愛情と学歴、学問があったことを歌っている。（当時のエンジニアは高学歴、高収入で、現場労働者の憧れでもあった）

「苦労、苦労で死んでった、母ちゃんの唄こそ世界一」という歌詞に昭和を生き抜いた人の多くが共感し涙を流した。

＜ヨイトマケの唄＞

あれから何年　たった事だろ
高校も出たし　大学も出た
今じゃ機械の世の中で
おまけに僕はエンジニア
苦労苦労で　死んでった
母ちゃん見てくれ　この姿
母ちゃん見てくれ　この姿

何度か僕もグレかけたけど
やくざな道は　ふまずにすんだ
どんなきれいな　唄よりも
どんなきれいな　声よりも
僕をはげまし　慰めた
母ちゃんの唄こそ　世界一
母ちゃんの唄こそ　世界一
（昭和４１年　作詞、作曲、: 三輪明宏　）

この時代、他にも同じような唄がヒットしている。新聞配達をしながら家族を養い、眠い目をこすりながら学校へ通い、いつかは学歴で人生の幸せをつかもうとする若者を歌ってヒットした「新聞少年」という唄がある。

＜新聞少年＞
今朝も出がけに母さんが
苦労かけると泣いたっけ
病気でやつれた　横顔を
思い出すたび　この胸に
小ちゃな闘志を　燃やすんだ
（「新聞少年」昭和４０年　作詞：八反ふじお　作曲：津島伸男）

＜ヨイトマケの唄＞の唄の中で、（子どものためならエンヤコラ～）と汗を流す母親に「なんのために勉強して学校に行かなければならないのか？」と質問する子どもはいないだろう。

「新聞少年」の唄の中で、（小ちゃな闘志を燃やすんだ）と言いながら早朝に新聞を配る少年に「何のために勉強するの？」と質問する人はいないだろう。

昔は、自ら勉強し上の学校へ行くことは、自分で人生を切り開くことを意味した。

貧乏な親をなんとか助けたいという思いも強かったのだろう。

夜間中学や夜間高校がしっかりと機能していたし、ちょっと前までは、若い頃学校に行けなかった人達が高齢になって夜間中学や夜間高校へ入学するという苦労と感動のドラマもたくさんあった。

これらのことは、昭和初期から中期における学問や学歴に対する強い憧れや執着を表している。誰にも教わらずとも社会が勉強の意味とその効力を保障してくれていた。

子どもが親の学歴を抜き、親の収入を抜いてくれることは、何より親のステイタスになり、子どもにとっても孝行の証となった。

当時の子どもの夢は「腹いっぱいかつ丼を食うこと」「カレーライスを食べること」「巨人、大鵬、卵焼き」である。
今の世の中、卵焼きを食べることが夢である子どもはいない。親にしても余程の事情がない限り、今晩のごはんに苦労する人もいない。

「うちは貧乏だから学費の安い公立へ行きなさい」というお決まりの脅し文句も迫力がない。だいたいこういう脅し文句を言わなければならないこと自体がもう迫力がないのだ。

昔の子どもはそんなことをわざわざ親から言われなくても全身全霊で貧乏を噛みしめていた。だから自分が親を助けたいと思ったし、学費も自分で稼ぐのが当たり前だった。郵便局の学資保険に回すお金などなかったのである。

子どもは親を助けたいという習性がある。なんとか学問で親を助けたいと思う子どものモチベーションは低くない。

ところが今のご時世、子どもが親よりも高学歴、高収入になるのは難しい。

新聞配達をして苦労などしなくてもご飯は食べられるし、学校にも行ける。親の収入さえ安定していれば、誰でも大学にまで進学できる全入時代になった。
テレビも冷蔵庫も車もない、毎日食うことで精いっぱい。抜け出す道は学問、学歴。

「よっしゃ、やったるで！」と闘志を燃やす子どもに「勉強する意味」など教える必要はないが、衣食住足りている上に、大学を出ても親の収入を超えられない子どもには勉強の意味が見えなくなった。

「俺が勉強して働いて父ちゃんと母ちゃんに楽させてやるよ！」という子どものハングリーさは自ら生きる幸せにもつながるが、「いいから親の言う通り大学まで行けばいいんだ、金は出してやるから」という愛情の押し付けは、自分で生きているという実感を子どもから奪う。

勉強する意味を見失った子ども達は不登校や引きこもりになり、勉強や学校から降り出した。
あるいは東南アジアの素朴さの中に自分の活路を見出し、日本という国から撤退する若者もいる。

一番あわてたのはそんな子ども達の親だ。ちゃんと大学まで行ける資金や環境を準備したにも関わらず、子どもは親に感謝するどころか不登校や引きこもりという形で世の中から降り出した。

学問を身につけさせて子どもを幸せにしてやるつもりが、なんでこんなことになるのだろうと親は戸惑う。

「頼むから学校へ行かせてくれ」という子どもと、「学問なんぞは役に立たないから働け！」と言っていた親の関係が、親が子どもに「頼むから学校へ行ってください」とお願いする時代になった。

大学を出ても景気の動向によっては就職などないという現実を、子どもに「勉強しなさい！」という親が勉強しなければならないのだが、親は頑なに自分の信念を曲げないし、問答無用で子どもに勉強を押し付ける。

「勉強することに意味がない」という意味を見出した子どもは「何で勉強しなければならないの？」という根源的な疑問を親にぶつける。

親はその問いに答えられない。

「勉強アレルギーの方程式」

「勉強が苦痛である経験」＋「勉強する意味を理解していない」
＝勉強アレルギーの子どもになる

花粉症というのは、花粉によるアレルギー反応である。

その症状は鼻水が出たり、涙が出たり、くしゃみが出たりとても不快なものだ。

勉強アレルギーというのは、勉強によるアレルギー反応である。

その症状は、教科書や机に向かうだけで嫌気がさしてしまう。

スギ花粉アレルギーの人がスギ花粉のまん延する杉山に近づかないように、勉強アレルギーになった子どもは勉強に近づかなくなる。

その症状は目には見えないが、言葉ですぐにわかる。勉強アレルギーのある子どもは、勉強を目の前にすると「もうええし」「だるいし」「うざいし」という言葉を連発し、そこから逃げ出してしまう。

こうなってしまってから再び勉強のモチベーションを高めるのは難しい。

「学ぶ」ということは本来楽しいことなのに、学ぶことにアレルギー反応を示す子どもが増えている。

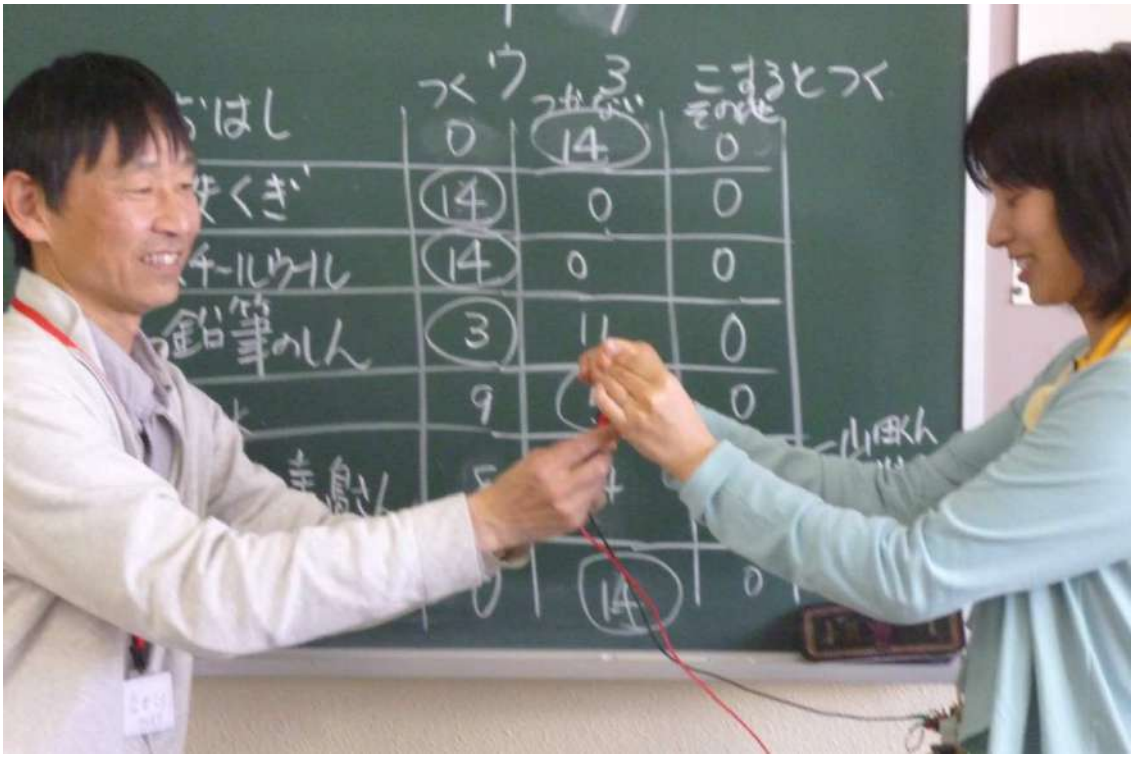
親の貧困や低学歴が子どもの学力低下の要因であるというデータもあるが、昭和を生きた親の貧困と低学歴は今の比ではなかったはずだ。

しかし、今と昔を比較して嘆いてばかりいても仕方ない。

勉強が苦痛である経験をする前に、勉強する意味を親と子に教える方法はないのだろうか・・・。

このことを考え出したのが「日曜寺子屋家族塾」を始めるきっかけになった。

（次号へ続く）


こするとつく
つく
つかない
その他
はし
0
14
0
くぎ
14
0
0
チールウール
14
0
0
鉛筆のしん
3
11
0
9
0
山田くん

日曜寺子屋家族塾の取り組み 3

古川　秀明

スクールカウンセラー（以下 SC と表記）をしていて、勉強に関する家族の問題を多く扱う中で、その解決に以下の２点が必要であると思われた。

１．親に「勉強する意味」を学んでもらい、それを子どもに伝えてもらう。
２．子どもに勉強する楽しさを経験してもらう。

「親に勉強する意味を学んでもらい、それを子どもに伝えてもらう」

方法

保護者対象の講演会やカウンセリングで「勉強する意味」を話すと、今までそのような話を聞いたことがないという感想が多く寄せられた。

高校までの学校教育の中で「勉強する意味」を教えてくれる授業はない。大学の哲学や教育などの専門的な授業のなかでも取り上げられることは珍しい。

「勉強の意味」教える義務がある機関もない。勿論私が教える義務もない。

食うために勉強をして、資格や能力、学歴を身につける。その考え方にケチをつける必要もないし、この先もその考え方は機能するだろう。

私一人が「勉強する意味」をギャーギャー騒ぎ立てても世の中何も変わらない。

そんなことをするより、趣味の魚釣りをしているほうが楽しい。

よし決めた。勉強する意味など知らない顔して、見て見ぬふり振りをしよう。

そのうち誰かがやってくれるだろう。

だいたい私がこれでいいと思っている「勉強の意味」も本当にそれで良いのかどうかは疑問だ。

何もしなければ誰からも批判や非難されることもない。

そのように思う反面、これでいいのだろうかと思う自分もいた。

敗戦で、焼け野原の何もない所から、ここまで這いあがってきた親世代の勉強スピリッツには説得力もあるし、物質的にここまで豊かな国にした実績もある。

だけどそのやり方で育てられる子どもや若者が、不登校や引きこもり、いじめや自殺という社会や大人に対する地味なク

ーデターを起こしているようにも見える。

だけど、そんな考え方も私の片寄った考え方かもしれない。

それならばもう少し私のやり方で私の考えを人々に投げかけてみよう。

それで反応がなかったら何もしないでおこうと決めた。

そこで最初に思いついたのが講演会。

「つながりを考える」「孤独を考える」「勉強を考える」という演題で講演を始めた。

対象が大人の場合、どこの会場でも手ごたえがあった。

対象が子どもの場合、どんな反応するのだろうか・・・。

子ども達の感想を聞いてみたい

そこで、講演の対象が小学生（５、６年生）や中学生の時は、子ども達に講演の感想を書いてもらった。

学校は、講演会を授業の一環として位置付けているので子どもの感想記入について積極的に協力してもらえた。

感想は講演前と講演後に記入してもらい、講演前には孤独や勉強についての話をどう思うか？という質問に答えてもらい、講演後は講演を聞いた後の感想を書いてもらった。

その結果、小学校、中学校を問わず似たような結果になった。

講演前の感想

「わからへん」「早く終わって欲しい」「退屈そう」「なんでこんなんすんの？」「もうええし」「はよ帰って遊びたい」「書く意味なし」「勉強嫌い」「孤独て意味不明」「手品ある？」

記入は任意にしたので、中学生では７割が未記入、２割が講演会に対する批判や非難。残りの１割が講演に少し期待している内容だったが、「どうすれば成績が上げられるのか聞きたい」といった内容がほとんどだった。

小学生では誰か一人が「わからへん」と書くと、それをみんなで写したのだと思われるが、その後１０人くらいが「わからへん」ということを書いている。

つまりほとんどの子どもが勉強に関する講演会に関心がなかったのだ。

講演後の感想

小学生では、講演前の、「わからへん」「知らん」というような同じ言葉が何枚も続く感想がほとんどなくなった。

中学生では講演後の感想提出率が８割を超えた。

そして、「勉強」の話をしたのだが、その話を聞いて、家族や友達の悩みを書く子

どもが多くいた。

「勉強する意味」は自分の生活に大きく関わっていることを何となく感じてくれたようだ。

＜小学校５年の女の子の感想＞

「私はいつも友達から仲間はずれにされます。今もＡ子ちゃんとＢ子ちゃんにハミられ（仲間はずれにされること）てます。お母さんに言うたら、仲間はずれにされて悔しかったら、勉強で一番になって仲間はずれにした奴を地獄に落としたりてゆわはりました。そやから塾に行けて言われて塾に行ってます。けど私はＡ子ちゃんやＢ子ちゃんと仲良くなりたいだけやし、地獄には落としたくありません。今日のお話を聞いて、勉強は誰かを地獄に落とすためではないことがわかってうれしかったです」

＜中学３年生男子、Ａ君のエピソード＞

Ａ君は大変素行が悪く、地域や学校でも有名な非行少年。学年集会や行事でみんなが集まると必ず騒ぎを起こしていた。私の講演会の時も二人の屈強な教師に両脇を抱えられ、それでも「話なんかだるいんじゃ、はよ帰らせ！」とわめきちらし、その度に両脇の教師にきつく指導されていた。話の流れの中で、そんなＡ君に私が「君は誰かに親切にして喜ばれたことあるか？」と尋ねるとＡ君は「他中の奴とグループで喧嘩になった時に、ツレがやられそうになったんを助けたったんや。ほんならごっつう喜びよってな。それから俺ら親友になったんや」と得意げに答えてくれた。Ａ君の一言で会場は爆笑に包まれた。和やかな空気になったところで、私はＡ君に「そのツレに感謝された時、君はどんな気持ちになった？」と尋ねると、「そらうれしい気持ちになったに決まってるやんけ」と答えてくれた。「なんでうれしい気持ちになったん？」と尋ねると、Ａ君はう～ん、う～んと考え出した。「ほんなら今から私がなんでうれしい気持ちになったか教えたげるから聞いてくれるか」と言うと、Ａ君は最後まで静かに聞いてくれた。講演の最後に「Ａ君、最後まで静かに聞いてくれてありがとう。Ａ君が静かに聞いてくれるという親切な行動を私にしてくれたので、私はとても助かりました」と話すと、Ａ君は私に右手でピースサインを送ってくれ、会場のみんながＡ君に拍手をした。後日Ａ君の担任の先生から、「Ａ君が３０分以上みんなの中で静かに座って誰かの話を聞いたのを見て、学年の教師全員が驚きました」という話を聞いた。

私は子ども達に非行防止や健全育成や友情のことについて語ったのではない。
なぜ勉強するのかを話したのである。

その勉強の話を聞いた子どもたちは勉強以外の大切なことに気づき、自分の心の中に小さな変化を起こし動き出した。

これらの感想やエピソードは「勉強する意味」の話は大人だけではなく、子どもにも伝わるものがあるということをわからせてくれた。

そして、親だけではなく、子どもだけでもなく、親と子が一緒に勉強をする意味を学んだらどんなことが起こるのだろう・・・ということに興味を持った。

「親に勉強する意味を学んでもらい、それを子どもに伝えてもらう」という私の考えはいつのまにか、親と子が一緒に勉強する意味を学び、そのことを共有して、親子で勉強の意味を考えられる場を私が提供したら、何かもっと良い変化が起こるかもしれないという考えに変化していた。

（次号に続く）

日曜寺子屋家族塾の取り組み　4

古川　秀明

仲間が集まる・・・中井哲郎

親と子が一緒に勉強する意味を学び、親子で勉強の意味を考えられる場を私が提供したら何か良い変化が起こるかもしれない。

この仮説を形にするにはどうしたら良いのだろう。

私ひとりの力で学校のような大きな施設を作るのは無理。

この時に私の頭の中に「塾」という形が浮かび上がった。

勉強を教える前に「なぜ勉強をするのか」を教える塾。

いや、なぜ勉強するのかを学びながら教科学習を平行して行う塾のほうが良いのではないだろうか・・・。

あれやこれやと考え調べていると、「寺子屋」という日本の中世から明治にかけて広く庶民に浸透し、識字や算術などのレベルを世界トップレベルにまで引き上げていた教育システムにたどり着いた。

それから私は勉強に関する持論や寺子屋を応用した「私塾」という形の教育システムについて、ことあるごとにいろんな人に語った。

私の話を聞いた人の反応は様々だったが、中井哲郎という現役の中学教師（理科担当）の反応は他の人とは違っていた。

中井は私と同じことをずっと考えていたという。

中井も寺子屋という教育システムに強い関心を持っていた。

意気投合した私と中井は時間も忘れ、寺子屋の構想について話し続けた。

中井は勉強の意味や意欲の重要性について、以下のような論文をまとめている。

◆ 今の学校教育のイメージは「暗い」？「明るい」？

今の学校教育のあなたのイメージは，「暗い」ですか？「明るい」ですか？

仮説実験授業を提唱された板倉聖宣さんは「教育の未来は明るい」と断言されています。

板倉聖宣さんは，**「教育が生まれ変わるために」**という本の〈はしがき〉に〈教育の内容と方法を全面的に改革すれば，「子供たちは素晴らしく意欲的に勉強するし，人間的なあたたかさを示しもする」ということを見てきています〉と書いておられます。

仮説実験授業は提唱されてから，今年で 50 年が経ちました。でも，50 年たってもなかなか仮説実験授業は広まりません。それは，教育を全面的に改革しようとしているからなのです。

「第一部　教育の現状」には「自分の判断で行動する人の時代」

－登校拒否児の増加は明るい社会の前ぶれ

という論文が載っています。

「不登校になることは悪いことなのでしょうか？」

このことについて，板倉聖宣さんは教育の歴史の視点から，今の教育の現状を紐解いておられます。

◆ 教育の未来を語る

1872 年＝明治 5 年以来, 近代学校制度が始まって, 就学率はどんどん上がっていきました。明治維新以降，日本は近代国家を目指すために，「欧米の文化を全面的に模倣吸収しよう」と高い学歴を得た人材の育成に力を注いできました。その学歴主義によって日本は支えられてきました。そして，子供たちの学習意欲も高められてきたというわけです。その甲斐があって，日本は高度成長を経て，先進国の仲間入りを果たしました。その背景には、学歴社会の構造がありました。（いい高校に入って，いい大学に行って，いい会社に就職して，高い給料をもらう―エリート意識）

ところが，進学率は 100%にはなりませんでした。高校進学率は 94%くらいで止まり，中退者も増えてきました。高校卒業率は 88%，大学進学率は 35%くらいで止まっています。（大学の進学率は 1976 年の 40.9%がピークでした。この年はちょうど私（中井）が大学に入学した年です。）

そして，高度成長は 1975 年でストップしました。高度成長がストップしたのと期を一にして進学率もストップしたのです。

では，どうして進学率がストップしたのでしょうか。それは，高度成長を果たした日本には，もう外国から模倣する知識が必要なくなったからです。高学歴の人材がそれほど必要なくなったのです。高い学歴さえあれば，いい会社に入れて，高い給料がもらえるということは，もはや幻想になってしまいました。いい会社どころか，就職することもとても難しい時代になってきているのです。

そして，逆に増えてきたのが登校拒否＝不登校です。また，社会問題ともなっているニートと言われる若者も増えてきています。

◆明るい話〈不登校〉

では，1975 年で高校，大学の進学率が止まったのは悪いことなのでしょうか？

高校には行った方がいいのでしょうか？大学には行った方がいいのでしょうか？

進学率が止まったのは，「行かなくてもいい」と思ったり，たとえ行っても退学してしまう若者が増えたからです。そして、学校に行かない不登校の子供たちが増えているのです。

みなさんは，勉強が役に立ったという知識はどれくらいありますか？

不登校の子供たちは無言で〈何とか教育のやり方を転換してほしい〉と要求しているのです。そして，今の子供たちは昔の子供たちと違って、嫌いなものは〈嫌いだ〉という能力が出てきたのだとも考えられます。

子どもの要求にあう勉強とは何なのか。それは子供たちが「たのしい」と感じる〈たのしい授業〉なのです。

そして，自分で判断して，自分自身の興味，自分自身の考えで行動する人間を作っていくことが大切なのではないでしょうか？

「教育が生まれ変わるために」　板倉聖宣（1999）　P14~27　より

（補足・加筆　中井）

◆　**「学力低下」が叫ばれていますが**

そもそも〈学力〉とは何でしょうか？

「子どもの学力、教師の学力」という本の

「子どもにとって学力とは」〈学力と意欲の関係について－学力か意欲か〉の中で，板倉聖宣さんは次のように書いています。

（1）	〈学校教育の成果〉＝〈学力〉＋〈意欲〉
（2）	〈学校教育の成果〉＝〈学力〉×〈意欲〉

〈学力〉と〈意欲〉の関係については，（1）と（2）の関係が考えられますが，あなたはどちらが正しいと思われますか？

（１）は意欲が０でも学力があれば，成果が上がったことになりますが，（２）なら意欲が０なら成果も０です。板倉聖宣さんは，（２）が正しいと言われています。「いかに〈学力〉があっても，その〈学力〉を活かそうとする〈意欲〉がないことには，その学力は無用の長物となると思うからです。」と言われています。

今の学校教育は，「学力よりも意欲が大切だ」と〈ゆとり教育〉が導入されたかと思えば，数年後には，その反動で「学力低下は危機的状況である」と〈ゆとり教育〉から一転して，授業時間数の確保に躍起になっています。明治以降の日本の教育の歴史をみれば，昔から〈意欲重視の時代〉と〈学力重視の時代〉が交互にやってきています。

でも，その繰り返しばかりでは教育の発展は全く望めません。

◆ 子どもにとって学力とは

もともと，教育というものは「学習の条件が厳しい時ほど〈先駆者効果〉が期待できる」という傾向があります。「そのことを学んでいる人が少なければ少ないほど，希少価値が生じて，先駆者になりうる」のです。明治時代の大学生は，「日本を背負って学ぶ」という側面がありました。しかし，今はそういう〈先駆者効果，エリート効果〉は期待できません。「自分が勉強しなくても，他のたくさんの人が勉強している」ということになったら，学習意欲が低下しても当然ではありませんか。しかし，「学問や芸術そのものの素晴らしさに引き込まれる」ということなら，他人との関係はほとんど問題になりません。〈たのしい授業〉というのは，そういう一人ひとりの内面的な好奇心，興味に訴える授業として成立するのです。

「学力というものは，私たちにとって，子供たちにとってどのようなものが必要かを考え直さければければなりません。」そのことを考え直す時に，どこから考え直せばいいのでしょうか。

私は「明治以前に戻れ」と言いたい。

たとえば，みなさんが江戸時代の寺子屋の教師になったとします。そのときに，何をほんとうに情熱をもって教えることができるだろうか」と考える必要があると思います。

「子どもの学力、教師の学力」板倉聖宣（2007） P11、P108 より

◆ **「大人の学び」について**

日本では，「学ぶ」というと子供がするものと決まっているようでした。しかし，学ぶという行為は子供だけのものではない。明治以降の日本では，「学ぶということは大人になるための苦しみごと」というイメージが定着してしまったが，お稽古ごとは「たのしみごと」としてやるものだから，大人になっても続くのである。日本でも江戸時代には「学問」はお稽古ことの一つであった。何かのためでなく，純粋な「たのしみごと」として大人も学び，本当の学ぶ楽しさを教えるものであって欲しいと思う。科学・芸術を学ぶと世界や人生が見えてくる。今，時代が変わりつつある。大人たちこそ「たのしみごと」としての学びの豊かさを若者に示してやれないものでしょうか。

「子どもの学力、教師の学力」　板倉聖宣（2007） P112　より

◆ **いまなぜ〈たのしい授業〉か**

「たのしい授業」という雑誌が 1983 年に増刊されて，今年で 30 年になります。それまでは，〈たのしい授業〉より〈わかる授業〉と言われることが一般的でした。

「たのしい授業の思想」という本は、「たのしい授業」という雑誌の考え方をまとめた本ですが、その中の〈いまなぜ「たのしい授業」か〉と〈「たのしい授業」の思想―〈わかる授業〉と〈たのしい授業〉〉という論文は，「たのしい授業」０号に載っています。

◆ **いまなぜ〈たのしい授業〉か**

人類が長い年月の間に築き上げてきた文化，それは人類が大きな感動をもって自分たちのものとしてきたものばかりです。そういう文化を子どもたちに伝えようという授業，そ

れは本来たのしいものになるはずです。その授業が楽しいものになりえないとしたら，そのような授業はどこか間違っているのです。子供たちが自らの手で新しい社会と自然をつくっていく，そういう創造の力を育てようというのなら，なおさら，その授業はたのしいものでなければならないはずです。だから，私たちは，「今なによりも大切なのは，〈たのしい授業〉を実現するよう、あらゆる知恵と経験と力を寄せ集めることだ」と考えるのです。

◆　自ら新しい未来を切り開く喜びを

明治以後の日本の学校教育は，〈後進国型〉だったので，国をあげて外国を見習うことに情熱を注いてきたのが，今ではいつの間にか多くの面で世界の先進国並みになったので，その目標を失うことになった，といってもいいのです。

〈外国に追いつく教育〉は、決められた一本道をつっぱしる教育でいいのですが，その時には，〈わかる授業〉だけでもすみます。しかし、〈外国を追いこしてしまった後の教育〉は自ら道を切り開くための教育なので，道を開く楽しみを教える〈たのしい授業〉以外にはありえないのです。

「たのしい授業の思想」板倉聖宣（1988）Ｐ10~23

以上中井哲郎の論文（２０１３年８月）

このように、私は学ぶ意味を、中井は学ぶ楽しさを語り合った。

私と中井が出した結論は、勉強する意味と楽しさを家族が一緒に学べる私塾を作ろう、そしてその形態は「寺子屋」という日本の伝統ある教育形式を踏襲しようということになった。

塾の名前は「日曜寺子屋家族塾」に決定。

私が勉強する意味を教える「道徳」を担当し、中井が「科学」を担当することになった。

その時中井の作った案内文が以下である。

◆　日曜寺子屋家族塾に参加しませんか？

日曜寺子屋家族塾は，今までの塾の概念とは全く違います。今までの塾は，進学するため，または，学校教育の補習をするための塾でした。

そうではなくて，明治以前の江戸時代の寺子屋のように，「学問」をお稽古ごとのように純粋に「たのしみごと」として体験してほしいのです。しかも，子供も大人も含めた家族一緒にです。そして，科学・芸術を学ぶことで，新しい世界や人生が見えてくるようになれば，人生をより豊かに過ごすことができないだろうかと考えているのです。また，それにより家族の変化もみられるのではないかと仮説を立て，検証しようとしています。

このようにして、私の考えに賛同してくれる仲間がまずひとりできた。

日曜寺子屋家族塾の取り組み 5

古川　秀明

◆仲間が集まる

山口広美

山口は現役の中学英語教師。キャリアも長い。私と中井の考えに賛同し、参加することになった。授業だけではなく、広報、会場の手配、会計、書記などのこまごまとした事務仕事も全て引き受けてくれた。これらの仕事は結構大きなエネルギーを使うので有難い。英語だけではなく、アロマを使った親子実習や国語など、家族で学べる授業を企画した。どの授業も好評で、あっと言う間に時間が過ぎて行った。

寺島優里

寺島は保健師。幼稚園に通う娘を持つ子育て中のママでもある。読み聞かせが得意で、その声に大人も子どももひきつけられる。保健師としての知識を活かし、毎日の献立におけるカロリーや栄養バランスの重要性を、遊びやゲームの中に取り入れながら、家族全員に食の重要性をレクチャーする。子ども中心の献立は大人にとってかなりカロリーオーバーになる可能性があるなど、日常生活では学べない知識が増えた。

山田進治

山田は現役の臨床心理士。心理学をおもしろおかしく家族にレクチャーしていく。性格診断などの心理テストを実際に家族にやってもらい、難しい分析を

わかりやすく家族に解説して、こころという実態のないものをより家族の身近に感じれるような授業を展開。写真や絵を使った授業は子どもたちにも人気がある。また、山田自身が持つ、どこかユーモラスで飄々とした雰囲気が参加した家族の気持ちを和らげている。

小西賢宗

個人契約家庭教師「Ｋスタディ」を主催するプロの家庭教師。教科を問わず勉強を教える技術に卓越している。特に理数系に強く、算数の授業はそれを見学する講師も夢中にさせる。囲碁の有段者でもあり、囲碁を通じて、先を読む力や論理性、直観力など、コンピューターゲームとは違うおもしろさや興味を子どもに教えることができる。スケジュールが合わず、参加できないことも多いが、家族塾のイベントには必ず顔を出してくれる。

◆授業予定

講師が揃い、授業のプログラムをみんなで考えた。授業時間は午後１時から５時までの４時間で、ひとつの授業が終わる度に１０分程度の休憩をはさむことにした。毎回、中井の仮説実験授業（科学）の２時間と私の家族理解、勉強する意味（道徳）の授業１時間は欠かさず実施。残りの１時間を他の講師が１時間あるいは３０分ごとの交代で授業を受け持つことにした。例えばこんなスケジュールになる。毎回山口、山田、寺島、小西が交代で授業を受け持つ。

１時から２時５０分　科学（中井）
３時から３時３０分　英語（山口）
３時３０分から４時　心理学（山田）
４時１０分から５時　道徳（古川）

◆アンケート調査

一日の授業が終わると、毎回参加者にアンケートを記入してもらった。授業を受けたあとの家族の変化を数字や言葉により可視化するためだ。親だけではなく、幼児や低学年の子どもにも答えやすいグラフやイラストなどを使って工夫し、時系列による統計を取り、考察を重ね、その結果を対人援助学会で発表することを目標にした。データは 3 年分集めてまとめる予定。アンケートの内容は後に詳しく掲載予定。

◆最初に困ったこと

会場探し

講師もプログラムも決まったのだが、最初の課題は会場探しだった。京都市内だと貸し会場の費用が高く、特に日曜日の予約は、他の団体と競合することになりくじ引きなどになるため、安定した授業日程が組むのが難しかった。また、ほとんどの家族が子どもと一緒に参加するので、電車より車の利用率が高く、京都市内だと車で参加する家族の駐車料金の負担が大きい。さんざん迷ったのだが、初回の参加者は京都府南部から参加する家族ばかりだったので、京都府南部にある公共のコミュニティセンターを借りることにした。ここならば駐車場は無料で、電車で参加する家族には講師が最寄の駅まで送迎することにした。しかし、いくら郊外とはいえ、日曜日は他の団体と競合になるのは同じで、しばしば日程を変更せざるおえない場合もあり、それは現在でも大きな課題となっている。

スケジュール調整

月に一度とはいうものの、家族全員がスケジュールを合わせられるのは子どもが小学生以下に限定されてくる。小学生以下でも卒園式や親せきの行事、子ども会などと重なると毎回参加するのが難しい状況になった。中学生以上になると部活や塾などとも重なり、毎回の参加は難しい。また思春期になると反抗期ということも影響して、親が説得して連れてくるのも難しくなった。
会場の広さで考えれば４家族が限界だったが、4 家族が全員揃うことはまれであった。毎回どこかの家族か、家族メンバーの誰かが欠席となる。
講師のスケジュール調整も大変だった。みんなそれぞれ本業があるので、どうしても都合がつかない日もある。
それらは講師がお互いの授業時間を交換しながら乗り切るしかなかった。

運営費

いくら節約しても全く費用がかからないということはない。講師は全員ボランティアで報酬なし。しかし、会場費、告知にかかる費用、教材費用に関しては最大限節約しても費用が発生する。朝から準備を始め、一日拘束される講師の食事代や交通費も一切なし。営利目的ではないので、講師はみんな納得していたのだが、長期になるとその負担が重なり、大きな課題となった。

（次回に続く）

日曜寺子屋家族塾の取り組み６

古川　秀明

◆２０１２年　第一期生　４家族　１６名参加

「子どもの様子」

第一期生で参加した子どもの年齢は０歳から１６歳まで。
つまり、赤ちゃんから高校生まで。
この年齢の幅をどのように埋めるのか、講師は不安だった。
赤ちゃんには勉強よりミルクが必要だ。
１時間目、中井が担当する仮説実験授業は「目には見えない分子」の授業。
小学生でもわかるように授業内容は工夫されているが、乳幼児には到底理解できない。
きっと小児科の待合室のように騒々しい教室になるだろうと思っていたが、そんなことはなかった。
赤ちゃんを含む乳幼児は皆おとなしく授業に参加している。
参加しているといっても授業を理解しているわけではない。
授業に楽しそうに参加している両親や兄、姉を見て何かを感じているように思える。
家族みんながにこにこと笑いながら勉強している姿をみているだけで子どもは安心するようだ。
仮説実験授業は休憩を入れて２時間の授業なので、いかに安心しているとは言え、やはりぐずりだすこともある。
そんな時はスタッフが子どもを抱いて散歩に出る。
最初はスタッフに人見知りしている乳幼児もすぐに慣れてくれた。

「親の様子」
講師がぐずる乳幼児を連れだすと、母親がとても楽そうな表情になった。
乳幼児の子育ては、なかなか息を抜く暇がない。
安心して任せられる講師に子どもを預けることは、少なからず母親の息抜きになった。
そして、その息抜きが分子の勉強。
「学生の時は勉強の息抜きに何かをしたのに、今は子育ての息抜きに勉強しています」と笑いながら答えてくれたのが印象的だった。
「学生の頃は嫌でしょうがなかった勉強がこんなに楽しくて分かりやすいとは思いませんでした」と言う人が多いのにも驚いた。
大人の社会人という身分から、教室にいる生徒の身分に戻れたのも変化があって楽しいのかもしれない。
学生の時は「こんなつまらないもの、覚えてもしょうがない！」とつっぱっていた子どもも、大人になると断片的ではあるが覚えている知識も多く、それを懐かしがったりもする。
人間と言う生き物は、学ぶ生き物なのだということがよくわかる。
普段無口で、あまり存在感のないお父さんが、授業になるとすごい博学であることがわかったりする。
そうなると今までの父親の印象も変化する。
どの親も自らエントリーして家族塾に参加しているのでもともと学習意欲は高いのだが、何かを学ぼうとする親の熱意が子どもに伝わって、子どもの学習意欲を少なからず刺激しているように思えた。

「子どもの様子」
家族と一緒なので、当然だがここにはいじめがない。
また、上下の序列もない。
そういう環境が整うと、とても勉強しやすくなる。
しかし、小さい子ども達はだんだんと騒ぎ出す。
やかましい声を出しながら走り回られると集中できなくてイライラする。
さぞかし集中できないだろうと思ったが、そうでもなかった。
人間、集中すると周りの雑音は耳に入らなくなるようだ。
というより、雑音の中から講師の声をなんとか聞きわけようと余計に集中力が増しているように思えた。
休み時間になると、大きい子は小さい子の面倒をみるようになった。
少子化できょうだいの数が少ない現代は、同年齢の子と遊ぶことが多い。
昔は様々な年齢の子が一緒に遊び、その中で序列や優しさ、厳しさを学べたが、

その効果が家族塾の子ども達のなかで起こっているのがわかった。
また、家では一人っ子や末っ子の子が、家族塾ではお兄ちゃんやお姉ちゃんの役割を担うことになり、そのこともとても新鮮な体験になっているようだ。
親が子どもに勉強を教えるというのはよくあることだが、親が勉強しているところを子どもが見るという経験はあまりない。
親と子という主従関係から、一緒に学ぶという横並びになることで少なからず家族システムに変化があるように思えた。

「講師の様子」
家族塾で一番元気になっているのは講師かもしれない。
何の制約もなく、自分の教えたい内容の授業を自分の思い通りに教えられることが元気の源になっているようだ。
当然講師には気合いが入るし、塾生にもその熱意が伝わる。
その証拠に塾生からの質問が活発に出てくるのだ。
時には難しくて講師が答えられない質問もあるのだが、「次回までに調べて来ます」という返事をして、その次の回では必ず答えるようにしていた。
即答できない質問が来ることが、それだけ自分の授業を聞いてくれているという確信になり、それがまた講師を元気にした。
そうなると、講師は授業をするのが楽しくなり、少しでも授業を増やしたいと思うようになった。
一日に４時間の授業しかないので、それを５人の講師でシェアするのだが、授業を実施することに消極的な講師はいなかった。
誰かが授業をしているときは、他の講師はその授業の補助にまわった。
学校で言えば加配の教師が４人も教室にいるようなものだ。
小さい子がぐずりだすと、すぐに他の講師がその対応にまわった。

「振り返り」
家族塾では学習到達度を他者と競争するようなことはないし、何かの資格を得られることもない。
月に一度家族が集い、家族みんなで「勉強」を楽しんでいる。
その中で家族が何を得ているのかを可視化するために、毎回最後にアンケート調査を実施することにした。
その結果についてはまたあらためて発表したい。

日曜寺子屋家族塾の取り組み７

古川　秀明

◆２０１４年８月１７日（日）

参加５家族のうち、お盆休みの帰省のため２家族が欠席。

＜仮説実験授業～水の表面～＞　ＰＭ１：００～３：００

１）水はコップにどのくらいまで山盛りにすることができるかを詳しく調べる実験

（実験方法）

コップのふちすれすれのところまで水を入れておき、そのコップの中に一円玉を一枚ずつ静かに入れていく。一円玉は静かに沈むので、簡単に表面の膜がやぶれて水がこぼれることはない。そこで、一円玉を何個ぐらい沈めたら水がこぼれだすかを調べる。

（予想）

ア）一円玉を１枚入れたらこぼれだす。

イ）一円玉２～５枚でこぼれだす。

ウ）一円玉６～１０枚でこぼれ出す。

エ）一円玉１１～１５枚でこぼれ出す。

オ）もっとたくさん（　　）枚くらいでこぼれだす。

（家族の様子）

まず、コップに水をすれすれまでいれることにみんな夢中になった。そこから予想を立ててもらった結果、ほとんどの家族は、イ）と予想した。いくらなんでも５枚以上は無理だろうという仮説が多かった。

（実験開始）

どの家族もまるでゲームをしているような感覚でわきあいあいと一円玉を１枚ずつ入れていった。５枚を超えてもぜんぜんこぼれない水に大人も子供もびっくりする。自分たちの立てた仮説が崩れて行くのが悔しいような、楽しいような・・・。

（実験結果）

家族によりバラつきはあるのだが、だいたいどの家族も３０枚くらいの一円玉を入れることができた。この実験により、表面張力について小学生から大人まで強く興味を持つことができた。水がこぼれ出すまでに水が盛り上がり、まるで水の表面に膜があるように見えることも同時に確認してもらう。

２）水の表面には、本当に膜のようなものがあるのだとしたら、その膜の上にものをのせることができるかもしれません。木や発砲スチロールとはちがって、一円玉は、一度水の中に沈めたら浮き上がってきません。しかし、その一円玉も、うまく水の膜の上にのせてやれば、水の上に浮かせることができるかもしれません。実際にやってみましょう。

（予想）

ア）一円玉を水に浮かすことなどできっこない。

イ）油をぬったり特別なことをすれば、浮かせることができる。

ウ）特別なしかけをしなくても、かんたんに浮かせることができる。

（家族の様子）

イ）とウ）の半分ずつに意見がわかれた。家族内でも意見がわれたが、必ずしも家族でひとつの答えを出すのではなく、家族それぞれ、多様であってもいいという話も盛り込んだ。

（実験結果）

実験結果はウ）特別なしかけをしなくても、かんたんに浮かせることができる。だった。ところが、一円玉を水に浮かせるのが結構難しく、大人より子供の方が上手く浮かせることができた。そのことに子供は大喜び。この子供たちは一円玉が水に浮くことを家族の思い出とともに生涯忘れないだろう。

３）水の表面張力や分子の働きを理解する基礎として、界面活性剤の実験を実施。

（説明）

「界面活性剤」というものがあるのを知ってますか？（参加者のほとんどは知らない、あるいは聞いたことはあるという反応）。粉せっけんや合成洗剤の容器をみると、その成分が「界面活性剤（６１％）」とか「界面活性剤（２１％）」などと表示されています。この「界面」というのは、表面とか境界面というのと同じことで、「界面活性剤というのは、水などにほんの少しとかしただけでその表面（界面）の性質を大きく変化させるもののことをいうのです。ふつうは、水の表面の膜の働きをうんと弱める働きをします。水の表面の膜が弱くなると、水がものの間にしみこみやすくなったり、泡立ちやすくなります。もののよごれをとる働きも強まります。昔から使われているセッケンも界面活性剤の一種なのですが、近頃では、セッケン以外にいろいろな界面活性剤が開発されています。

（実験）

はじめに水の表面に一円玉を浮かせておきます。その水の表面に合成洗剤を一滴、静かに落としたらどうなると思いますか？

（予想）

ア）一円玉はすぐに沈んでしまう。

イ）一円玉は前よりらくに浮かぶようになる。

ウ）ほとんど変わらない。

（家族の様子）

界面活性剤の説明を聞いた後なので、全員がア）一円玉はすぐに沈んでしまうに手をあげた。しかし、ほとんどの人が半信半疑で、早く実験をしたそうであった。仮説を立てて興味を持ち、実験で確かめるという一連の学習パターンの流れがよく定着しているのがわかる。

（実験結果）

水槽の表面にびっしり浮かせた一円玉約５０枚。その水面に一滴合成洗剤を静かに落とすと、一瞬で全ての一円玉が水の中に沈んだ。この実験結果にはどの家族も驚き、歓声をあげた。

このような手順で、水、表面張力、分子、界面活性剤の関係を学んでもらった。授業後のアンケートには、どの家族も５段階評価の「おもしろかった」「よく学べた」の項目に４以上を付けていた。

この後、アロマを使った「におい」の授業。子供たちだけの「ものづくり」の授業（今回は紙工作による、くるくるクラゲを作成）、大人のみの「道徳」の授業を実施した。

（感想と反省）

どの授業も家族の反応は良く、特に子供たちが授業に興味を持っているのがよくわかった。反省としては、会場の確保がお盆期間中になり、帰省と重なって参加できない家族があったこと。会場確保は毎月苦労しているので、今後なんらかの改善策が必要となるが、いまだ良い案は浮かばない。

講演会＆ライブな日々

古川　秀明

自らシンガーソングカウンセラーと名乗り、あちこちで講演会とライブをしている。うまくいく時もあれば、うまくいかない時もある。自分の記憶に残るのはたいていうまくいかなかった時や苦労した時のことだ。そんなあれこれを書いてみたい。自分の中のマイナスの記憶をトラウマなどにすることなく、おもしろおかしくユーモアに変換する能力を身に付けるためのエクササイスにもなるのだが、それを読んだ人のお役に立つとも思えないし、お付き合い願うのは心苦しい。だけど、対人援助マガジンは何を書いても良いということを聞いているので、気軽に楽しみながら書いてみようと思う。

〇月×日　Ａ市子育て支援講座

対象　０から３歳までの子どもを育てている母親
人数　１００人
場所　地域にある交流ホール

もともとは歌のライブを１時間して欲しいという依頼だった。自慢ではないが、子育てをする母親や子ども向けの歌をたくさん作っているので１時間歌うのはちっとも苦にならない。

ここで注意しなければならないのは乳幼児の集中力だ。
病気でもない限り、子どもが１時間も歌を大人しく聞いているわけがない。
早い子は１曲目からぐずりだす。大人しく聞く子でも２０分が限界だろう。

対象が全員子供連れなので、自分の子がぐずったりしてもよその子も同じようなものだから、そんなに気を使わなくても良い。あまり激しく泣く子がいれば保育ルームが別に用意してあり、そこで落ち着くまでいることもできる。

だけどせっかく来てくれるのだから、最後まで母子で楽しんで欲しい。

なにか良い方法はないだろうか・・・。

歌で子ども達をひきつけるコンサートといえば、ＮＨＫの「お母さんと一緒ファミリーコンサート」が有名だ。
よっしゃ、これを調べてノウハウを学ばせてもらおう。
情報収集を始めると、幸運なことに現役子育てママで、実際にコンサートに参加した人の話を聞くことができた。

それによると、
１．　チケットを入手するのはとても難しく、アイドル歌手並みの人気とのこと。
２．　ジャジャ丸、ピッコロ、ポロリはとっくに引退しているとのこと。（ブー、フー、ウーに関しては存在さえ知らないとのこと）。
３．　現在、番組の中で子どもに人気の歌は、どれも私（古川）の知らない曲ばかりであること。
以上の３点がわかった。しかし、どれも私が年を取ったという確認ができるだけで、さほど役に立ちそうな情報ではない。

そこで、その人の感想を聞いてみた。

それによると
１．　とにかく大きな会場で、後ろのほうの席だとステージの上のお兄さん、お姉さんが親指の先くらいの大きさでしか見えなかったとのこと。
２．　コンサート開始前から泣き叫び、ぐずる子が大勢いて、ぐずる子どもとそれを諌める母の声で、とても落ち着いて聞ける状況ではなかったとのこと。
３．　家の大画面テレビで観ているほうが、親も子もこころから楽しめるとのこと。
４．　入場料、交通費、グッズ購入などで案外お金がかかるとのこと。

以上の４点が語られ、私を暗い気分にした。

子ども達に人気のキャラクターや歌がたくさんある天下のＮＨＫファミリーコンサートでさえこのような感じであれば、私のような無名のシンガーソングカウンセラーというわけのわからないおじさんの、しかも生まれて初めて聞く曲を、大人の母親ならまだしも、乳幼児が大人しく聞くわけがない。

私の頭の中で、ライブが始まると子どもがギャーギャー泣き出し、それに母親があやしたり、叱ったりする声が重なり、会場はまるで阿鼻叫喚の世界となり、おまけに会場はホールなので、その声はよく響き渡り、私の声と交じり合い、とんでもないこととなり、最後にイライラした私が「てめぇら静かに聞きやがれ！」と、まるで場末のライブハウスで酔った客相手のライブのように怒鳴ると、主催者がいきなり幕を下ろし、あなたのような下品な人はもう二度と来ないで下さい！と怒鳴られる映像が浮かんできた。

これはなんとか対策を考えないと、１時間が私と参加者の苦痛の時間となる上に、主催者からは嫌われ、仕事がなくなり、「てめぇら静かに聞きやがれ！」と怒鳴ったことで、下手をすると暴言をはかれてＰＴＳＤになったと参加者に訴えられ、八丈島に流罪遠島申し付けられるかもしれない。

悩んだ末、私はある人のアドバイスを頂くことにした。
何か困ったことがあると、私はいつもこの方のアドバイスを頂き、はずれたことがない。

その方のお名前はその方にご迷惑をおかけするといけないので差し控えるが、めがねをかけていて、しゃがれた声で、大学教授で、漫画を描いていて、旅好きで、とてもよくしゃべられる明るい性格の男性とだけ書いておこう。

（続きは次号で）

講演会＆ライブな日々②

古川　秀明

前回のあらすじ

乳幼児とその母親対象のライブを依頼された私は、いかに幼い子と母に集中して聴いてもらうのかに困った。そこで団先生のアドバイスを頂いた。

団先生のアドバイス

①ただ歌を聴かせるだけなら、単なる余興に終わってしまう。その時面白かっても、会場を出たらすぐに忘れてしまう。
②せっかく同じ地域に住む１００組の母子が集うのだから、その地域で役立つようなことをすれば良い。
③知らない人同士が知り合うことで生まれるつながりをプロデュースすれば良い。

なるほどなぁ。よし、早速組み立ててみよう。
テーマは③の「知らない人同士が知り合う」にしよう。そうすれば地域での情報交換や声かけなどのセキュリティーも充実するのではないか。

手立て

１．１００組の母子をまず二つに分けて、そのなかでペアリングする。

- 二分割の方法は男女で分けるか、誕生日でわけることにしよう。

＜反省＞
　誕生日で分けたのだが、かなり片寄りが出た。今回は夏に生まれた子が少なかった。確率で言えば男女の出生比率は１：１なので、男女別の方が良かったかもしれない。

２．なるべく知らない人どうしでペアになってもらって語ってもらう

- 語る内容は子どもの名付け。誰が付けたのか、どんな意味があるのかなど、名前が決められたプロセスをお互いに語ってもらった。
- これが大盛況だった。ペアの子の名前の由来を聞くことで、より深く自分の中にペアの記憶が刷り込まれる。
- これで、ペアの子が公園とかで遊んでいたら、名前が分かるし、声もかけやすく、セキュリティもアップする

３．お互いに打ち解けたところで、子どもを交換し、みんなでおもちゃのチャチャチャを歌う

- これも盛り上がった。「チャチャチャ」のところはこちらがタンバリンを鳴らし、お母さんがペアの子の手を持って「チャチャチャ」と手拍子させてあげる。
- 泣きだす子もいたが、目の前に自分の母親がいるので、みんな楽しそうに歌っていた。

４．オリジナルの赤ちゃん体操「お背中とんとん子守唄」を歌い、赤ちゃんマッサージをしてもらう

- これはどこの保育所や幼稚園でやっても人気があるので自信があった。ここでもみなさんに喜んでもらえた。

５．お母さんの応援歌を歌う。

- ４．までで時間が４５分過ぎた。残り１５分。最後はオリジナルの歌を聴いてもらうことにする。

- 「どうぞそのままで」「がんばれ！お母さん」を歌う。
- 会場からすすり泣く声が聞こえてきた。

＜感想＞

気が付けばあっという間に終わっていた。参加者からもたくさん感想をもらった。（以下感想の一部）

- 「あっという間に終わって楽しかったです」
- 「歌に泣いてしまいました」
- 「私自身が凄い人見知りで、子育てしていても孤独を感じていたのですが、今日の講演会＆ライブに来させてもらって、まったく知らない人と話ができました。しかも、そのお母さん、すぐ近くに住んでらっしゃることが分かりました。こんど子どもと一緒にランチに行く約束をしました。なんかちょっと幸せな気分です。ありがとうございました」
- 「今日の講演会に来る時、正直ちょっと面倒臭いなぁ、退屈な話だと子どもが騒ぎ出したら嫌だなぁと思っていましたが、最初からゲラゲラ笑わせてもらい、気が付いたらもうおしまい？て感じでした。歌もあって本当に楽しかったです。ありがとうございました」
- 「どうぞそのままで」という歌に涙がでました。
- 子どもが泣きだした時など、地域の子育て支援サポーターのみなさんがいろいろフォローして下さって助かりました。
- 最初に保健師さんや、子育てサポーターの方の紹介があったので、これから先、何かとお世話になるのに大変役立ちました。

最初はどうして良いかわからなかったので、１時間はとても長いように思えたが、団先生のアドバイスで骨組みができてからは、逆に予定の内容や歌を削りこむ作業に追われた。

なにはともあれ大成功で、いつもながら団先生に感謝です。

講演会＆ライブな日々③

古川　秀明

Ａ中学校の入学説明会の時に講演を依頼された。
演題は「子どもの思春期を考える」
講演時間は６０分。対象は来年度入学する新一年生の保護者。
会場の会議室には例年より多い８０人の人が来ていた。

最初は校長先生のご挨拶。
中学生活で大切なことの要点をまとめて話される。
なかなかわかりやすい内容で、参加した保護者のみなさんも頷きながら熱心に聴いていた。
時折ユーモアも交えたお話に、場が和んでいく。
これはやりやすいかも。
先に会場の空気を暖めておいてもらえると、とてもやりやすい。

その次は制服の採寸について。
最近は詰襟ではなく、ブレザーだ。
学ランなどと呼んでいた自分の中学時代がまるで古代史のように思える。
採寸するときは、かなり大きめのサイズを選ぶと良いらしい。
中学生の成長は著しいので、中一と中三ではかなりサイズが変わるのだそうだ。
だから今はかなりゆったり目のサイズでも、中三になると、小さいくらいになるのだそうだ。
もちろん保護者はメモを取りながら必死で聞いている。

その次は教務主任から細かい事務的な説明があった。
給食の申し込みはいつまでとか、時間割とか、諸費の納入方法とか・・・。
これも保護者は食い入るように聴いて、質問もたくさんあった。

会場は熱気にあふれ、良い感じになっている。
これは本当にありがたい。
講演会はライブと同じで、臨場感が大切。
すでに熱気のある聴衆を惹きつけるのは、何にも反応のない所から始めるよりもかなり楽なのだ。

そして次はいよいよ私の講演会。
ここまでは割と実務的な話が多く、会場の保護者はみんな少し疲れているかもしれない。
ここはひとつ笑い話を入れて、みなさんの緊張を和らげたほうが良さそうだ。
ここまであんなに熱心に聴いていたから、ここで一気にリラックスしてもらい、私の話に集中してもらおう。
うんうん、なかなか良い流れだ。
さて、どんな冗談を言おうか・・・。
アドリブは得意中の得意なので、出たとこ勝負で行こう。
私は張り切って話し始めた。

「みなさん、こんにちは。スクールカウンセラーの古川です。今日は今から１時間ほど話をさせて頂きます。これまでの話は制服とか給食とか、諸費納入の手続きとか、大切なお話が多かったんですけど、私の話はまぁ余興みたいなもんでして、そんな話に付き合っている間はないなぁ、早く帰りたいなぁと思われる方は、講演が始まる今が帰るチャンスですよ。講演が始まると会場を出にくいですからね。さぁ、帰りたい方は今帰りましょう！」

会場は温かい笑いに包まれ、話が進んで行く・・・と思ったが、なんと、私が帰って良いと言った途端、一斉に保護者が立ちあがり、なんと参加者の三分の二が会場から出て行った。

残された校長、教務主任、私の三人は開いた口がふさがってしまった。

それでも私は講演を続けた（当たり前だ）。

残られたみなさんはみんな熱心に聴いてくれた。
だけどなんだか、ザラッとした感じが残った。
みんな用事があったり、合理的に必要なことだけ手に入れられればいいのだろうけど、講演会を聴く余裕もあっていいのではないだろうか・・・。

口は災いの元というのを実感できた講演会だった。

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

講演会＆ライブな日々④

古川　秀明

京都の西院というところに在日大韓基督教会がある。
ご縁があってここでライブをさせてもらった。
来られる方の国籍は中国、韓国、そして日本の三カ国。

ここでいったいどんな歌を歌えばいいのだろう。
ずっとこの三カ国の関係は微妙だ。
竹島や尖閣諸島の領土問題、ヘイトスピーチ、従軍慰安婦問題・・・。
いろんな考え方がある。
大切なのは「自分が今、韓国と中国と日本の人に何を伝えたいと思っているのか」だと思った。

あらためて考えて見ると、自分は今までアジアの国際情勢について深く考えることなどなかったことに気付いた。
教科書やマスコミから教えられる情報を、何の疑いもなく他人ごとのように受け取り、そして流していた。

何かを伝えたいと思う時に、どの視点に立つかで見える景色はまるで違う。
世界やアジアの中での自分の存在をマッピングして考えた時に、何にも考えたことがなかった自分に気付いた。
何かを歌にして伝えようと思った時に、グローバルな視点のかけらもない自分がいた。

このライブはそんな自分に気付かせてくれるチャンスをくれたようにも思える。

洗礼を受けたキリスト教徒ではないのだが、せっかく教会の神様の前で歌わせてもらうのだから、嘘や偽りのない気持ちを歌いたいと思った。

世間は憲法９条や安保保障関連法案で揺れている。
きなくさい。

安保で想定している敵国は韓国や中国だろう。
その時に私の頭の中にある言葉が浮かんできた。

「ゆりかごを動かす母の手は、やがて世界を動かす！」

そうだ！憲法がどうの、安保がどうのも大事だが、お母さんが我が子に「戦争に行くのは許さない！」と幼い頃から諭せばいいのではないか！
日本、中国、韓国のお母さんが手をつなぎ、連携して我が子を戦にやらないようにすればいい。

よし、決めた。そんな歌を歌おう。

会場には日本、中国、韓国のお母さん達がたくさん来てくれた。
まずは日本と中国と韓国は、こころの深い所で歌でつながっているのだということを証明してみた。

拍子（リズム）と音階でそれがすぐにわかる。
韓国で有名な「アリラン」という曲を軸に考えた。

みんなびっくりしてくれた。

そして、日本、中国、韓国の平和を願ってこの歌を歌った。

「母」のことを中国では「まぁ」と呼び、韓国では「おんま」と呼び、日本では「おかぁさん」と呼ぶ。
「まぁ、おんま、おかぁさん」という歌を作って聴いてもらった。

【ま～、おんま、おかぁさん】

中国語で「まぁ」、韓国語で「おんま」、
日本語で「おかぁさん」
お国で呼び名は違っても
母の願いはみな同じ
子供を戦にやりたくない
子供を殺されたくはない

海に浮かんだ小さな島を
みんなが争い奪い合う
自分が産んだ息子達が
戦争に行って殺されて
小さな島を手に入れても
母に残るのは遺骨だけ

まぁ、おんま、おかぁさん
手をつなぎましょう
二度と戦にならぬように
政治も男も軍隊も
母の愛には敵わない
母が我が子を諭しましょう
話し合いで解決なさい

政治も男も軍隊も
母の愛には敵わない
我が子の命を守りましょう
世界中の母の力で

歌っている途中から泣いている人が見えた。
歌が終わると大きな拍手をもらった。

日本の京都という小さいエリアの中で、１００人ほどの小さな集まり。
その中で歌を認めてもらっても、アジアの情勢になんの影響もないだろう。
会場を出て１０分もすれば、みんなこの歌のことも忘れてしまうだろう。

それでも私は今までにない幸福感に包まれた。

神様の前で、自分に嘘をつかずに歌えたことも大きな喜びだ。

このライブで、歌を売って成功するんだ！という今までの歌に対する考えが大きく変わったように思う。

講演会＆ライブな日々⑤

シンガーソングカウンセラー

ふるかわひであき

この春にユング心理学のシンクロニシティ（共時性）をテーマに講演をした。

シンクロニシティというのは、誰かの事をぼんやり考えていたらその人から連絡が来たとか、なんとなく胸騒ぎがしていたら、身内に何か不幸なことが起こっていたとか、道に迷っていたら今までずっと自分が行きたかったところにたどりついたとか、自分にとってとても意味のある偶然のことである。

シンクロニシティは「数字」「物品」「予兆」など細かく１７種類に分けられている。(興味のある人は独学してください。ユング心理学関連の本には必ず書かれています)

心理学会での発表ではないので、どなた様にも分かりやすく話さなければならない。

シンクロニシティという目に見えない力を説明するのは難しい。

何かの宗教や流行のスピリチュアルと誤解されるかもしれない。

そんな不安を持ちながら告知すると、たくさんの方に来てもらえた。

講演会が終わると、参加されたみなさんからたくさんの感想を頂いた。

今まで多くの講演会をしてきたが、こんなにたくさんの感想をもらったのは初めてだった。

聴衆が聞き入ってくれた確かな手ごたえと、話した後の満足感の両方揃う幸せはめったにないが、今回はそれに恵まれた。

それで満足していればいいのだが、それをもっと深めたいという欲に駆られて続編をこの夏に企画した。

誰でも体験できるこの不思議なシンクロニシティという現象はなぜ起こるのかをテーマにした。

心理学や哲学、宗教だけでなく、科学的にシンクロニシティを説明できないだろうか・・・。

いろんな専門家から情報を集めた結果、「量子物理学」という学問にたどり着いた。

この「量子物理学」はアインシュタインや朝永振一郎など、ノーベル物理学賞に輝いた多くの科学者が取り組んでいる。

さっそく独学で学びだしたのだが、これがかなり難解で、何冊も専門書を読みあさり、わからないところは物理を専門にしている大学の先生のところまで行って学んだ。

その結果、シンクロニシティに迫る考察ができた。

ざっくり説明すると、この世の物質の全ては量子という最小単位で出来ており、この量子は波の性質と粒子の性質を併せ持ち、人間の意識と深くつながっているということだ。

これだけを文章にしてもなんのことやらさっぱりわからない。

だけど私は、学ぶうちにかなりのひらめきを得た。

あとはこれをみなさんにわかりやすく説明するだけだ。

しかし、これが大きな落とし穴になった。

量子物理学の話をするうちに、聴衆のみなさんの頭の上にクエッションマークが浮かんで行くのがよくわかった。

それでも私は冷や汗と脂汗をかきながら、パワーポイントを駆使し、こころの中で「なんでわからへんの～！」と叫びながら必死で説明した。

講演が終わり、後日にまたたくさんの感想を頂いた。

その多くが「今回は難しくて意味がわかりませんでした」というものだった。最初の講演でやめておけば良かったという後悔にさいなまれたのだが、だけどやっぱりもっと深めたいという思いは消せなかっただろう。

もらった感想の中にすごく役に立ったという人が何人かおられた。

しかも私が話した以上に深いものを感じておられ、私もまたその感想から学べた。

講演会というものは、自分の考えや知識を他者に伝えるという行為だが、前回と今回の講演会では、話している自分が一番深く学んでいるように思った。

しかも、自分がより深く学ぶのは、耳に優しい感想ばかりに囲まれたときではなく、あまり歓迎したくない厳しい感想をもらったときだと思った。

耳に優しい感想をもらった後よりも、厳しい感想をもらった後の今のほうがはるかに次回の意欲がある。

今回の感想が厳しいものだったので、次回は人が集まらないかもしれない。

何かを人に伝えるという行いは、常に参加者がゼロになるかもしれないというリスクがある。

そのリスクを負いながら、今も次回の講演会の構想を楽しんでいる。

講演会＆ライブな日々⑥

シンガーソングカウンセラー

ふるかわひであき

「中国、韓国、日本のお母さんが手をつなぎ、子ども達を戦争に行かないようにつながりましょう！」というメッセージを込めた歌を作り講演会＆ライブで歌っている。

そんな話を中学３年生の男の子としていると、今までニコニコと私の話を聞いていたこの男の子が急に顔色を変えた。

「なんで日本が韓国や中国と手をつながないとあかんのや！あいつらが日本の領土を奪っとる張本人やないけ。竹島も尖閣も日本のもんじゃ！」

「従軍慰安婦とか南京大虐殺とかで因縁付けてくる輩となんで仲良くできるんじゃ」

「朝鮮人と中国人は日本から出て行け！」

何とも言えない嫌な感じの言葉を連発した。

まるで２チャンネルさながらの内容。

そういう情報をどこから手に入れたのか聞いてみると、彼は私にスマホを見せてくれた。

彼が保存しているフォルダには、中国や韓国を非難するサイトや動画がいっぱいあった。

カウンセリングをしていると、こんな若者に会う事が最近増えた。

普段はニコニコを大人しいのに、特定の話題になるとまるで人が変わったように攻撃性をむき出しにしてくる。

なんでそんなにむきになるんだろう・・・。
イスラム国の兵士達はみんな若者だ。

昨年の空爆で死亡した、イスラム国のテロリスト実行犯の一人、ジハーディ・ジョンは２７歳だった。

人質を殺害し、村を焼き払い、テロを続け、自分達の正義を押し通そうとする若者達。

テロに対する国際社会への批判や空爆による報復には、またテロで報復する。

なんで彼らは聞く耳を持たないのだろうか・・・。

遠い国の若者の話だと思っていたら、こんなに身近な所にも聞く耳を持たない中学生がいる。

古今東西と問わず、世界は自国と他国の間に起こる問題に直面する。

ヨーロッパでは難民の受け入れについて、ＥＵ諸国で意見が割れている。

難民を受け入れているドイツでは、学校に行きたくない少女が家出をして、男友達の所に泊っていたのに、避難民に誘拐されたというデマを流した。

そのことがきっかけで大きな騒ぎになった。

少女が驚いて、あれは嘘だったと撤回したので事無きを得たようだが、実にきな臭い話だ。

逆に避難民がひどい扱いを受けているというデマを、避難民を保護する団体の職員が流した事件も発生している。

ドイツでは自国民を守ろうという一部の団体が、かつてユダヤ人を弾圧した時のように、ファシズムによる外国人の排斥運動を始めている。

日本ではヘイトスピーチの問題が、国際的にも注目されている。

ネット上の発言に対して行われる、いわゆる「炎上」といわれる袋叩き。

リベンジポルノに２チャンネル。

どれもだいたい若者が中心の話だ。

耳を貸さない全ての若者にあてはまるかどうかは分からないのだが、この中学生はひどいいじめを受けていた。

自分がいじめられた腹いせに、なんの関係もない外国人を攻撃する。

そんな分かりやすいが、どこか怪しげな解説をしたいわけではない。

中学生の彼は語った。

「ヘイトスピーチとか聞いてたらスカッとすんねん。警察とか、見ている人がやり込められていくのが面白いねん。みんな遠巻きに見てるだけで何にもできひん。文句言う奴がいたらスピーカーとか街宣カーで大声でみんなでやっつけたらええねん。悪いのは外国人なんやから、言われても仕方ないんや」

ひとりぼっちでいじめを耐えているよりは、大義名分を持った仲間たちと一緒に行動する方がはるかに温かい気持ちになるのだろうか。

世界中でイスラム国の兵士になりたいという若者がいて、その対応に各国が手を焼いている。

なんとか考え直させようと、家族も必死になって説得する。

しかし、周りが説得すればするほど頑なになるところもある。

新興宗教に走る若者のようだ。

第二次大戦の時は、親が反対するのにも関わらず、多くの若者が特攻隊に志願して、その若い命を散らしている。

日本中が戦争を鼓舞するような働きかけを国民にして、それを受け入れないと非国民と言われ、村八分にされる。
それが嫌なのであからさまに戦争に反対できないのだが、気が付けば自分の子供が特攻隊に入り、名誉の戦死を遂げたいと言う。

そして、もう親でも誰でも彼らの固い決意を変えられない。

彼らをこんなに頑なに変えてしまう根底には何があるんだろう・・・。

そんな問いかけを歌で綴りたい。

たかが歌で世の中を変えることなどできない相談だ。

だけど歌い続けることで見えてくることもありそうだ。

平和を願う歌を歌い続けたい。

講演会＆ライブな日々⑥

古川　秀明

日本には「保護司制度」というものがある。

保護観察という刑事政策の一翼を民間の篤志家である保護司が無給で担うという制度だ。

保護司法の第１条には、「保護司は、社会奉仕の精神をもつて、犯罪をした者の改善及び更生を助けるとともに、犯罪の予防のため世論の啓発に努め、もつて地域社会の浄化をはかり、個人及び公共の福祉に寄与することを、その使命とする」。とある。

この使命を果たすため、保護司は、具体的には次のような諸活動に従事している。

１　保護観察

犯罪や非行を犯した人に定期的に会って、守るべき事柄の指導を行い、生活する上での助言、就労支援などを行う。

２　生活環境の調整

少年院や刑務所から出た人が社会復帰する援助を行う。

釈放後の帰住予定地の調査、引受人との話合い等を行い、必要な受け入れ態勢を整える。

３　犯罪予防活動

犯罪や非行を未然に防ぐとともに、罪を犯した人の更生について理解を深めるために、世論の啓発や地域社会の浄化に努めるもの。講演会、シンポジウム、ワークショップ、スポーツ大会等様々な活動が展開されている。

さて、このように社会貢献に寄与する保護司だが、誰でもなれるわけではない。

保護司になるためには、保護司法に基づき、次の条件を備えていることが必要となる

1　人格及び行動について、社会的信望を有すること
2　職務の遂行に必要な熱意及び時間的余裕を有すること
3　生活が安定していること
4　健康で活動力を有していること

保護司の委嘱手続は、各都道府県にある保護観察所の長が、候補者を保護司選考会に諮問して、その意見を聴いた後、法務大臣に推薦し、その者のうちから法務大臣が委嘱するという手続によって行われる。

保護司の任期は 2 年だが、再任は妨げられない。

このように、保護司になるには、なかなか高いハードルがある。

しかも、保護司の収入はゼロ。あくまでもボランティア活動なのだ。

今、日本で約五万人の保護司が活躍している。

日夜活躍している保護司の人達にスポットライトが当たることはあまりない。

芸能人や政治家のようにマスコミやメディアを賑わすこともない。

だいたい、保護司の存在すら知らない人だって少なからず存在するだろう。

誰にほめられることもなく、ちやほやされるでもなく、お金をもらうでもなく、ただ黙々と社会貢献に励む。

私のような底の浅い人間にはとても真似ができない。

真似はできないが、保護司の人と関わることは結構ある。

スクールカウンセラーをしていると、保護観察の付いた少年達と出会う機会が多いからだ。

「保護司のおっちゃん」

中学３年生の男子生徒がいた。

両親は幼い時に離婚して、妹と二人、母の下で育てられた。

小学校５年の時に母親が再婚し、新しい父親と同居し始めた。

ところが、この父親とそりがあわず、グレ出した。

窃盗や暴力事件を繰り返し、１号観察を付けられた。

中学三年の時に私と相談室で話すようになった。

初めての面接の時に、彼が最初に私に言った言葉は「俺、保護観付いてんねん。そやし、今日保護司のおっさんに会いにいかなあかんにゃ。ダルイわ」だった。

彼との面接は月に二度。

面接の度に、彼は保護司のおっさんの悪口を言い続けた。

「わけわからん」「うっとおしい」「鼻毛伸びとる」「役に立たん」「バカボンのパパみたいなやっちゃ」

そんな彼だったが、だんだんと保護司のおっさんに対する語り口が変わってきた。

「けっこうおもろいで」「なかなかええとこもあるで」「ネクタイ嫌いなんやて」

そのうちに、「保護司のおっさん」という呼び方が、「保護司のおっちゃん」に変わって行った。

その辺りから、授業に出席するようになり、非行事件はすっかり無くなった。
彼曰く「悪いことしそうになったら、保護司のおっちゃんの顔が浮かぶようになったんや。なんでやろうなぁ・・・」

彼と保護司の間で、いつもどんな話し合いがなされていたのかは知らない。

ただ、一度だけその保護司の方とお会いして話をすることがあった。

ひと目見て、失礼ながら笑いそうになった。

確かに鼻毛が伸びていて、バカボンのパパにそっくりだった。

私は心のなかで、お願いだから「これでいいのだ」と言わないでくれと祈った。

もしそれを言われると、笑いが止まらなくなりそうだから・・・。

彼も同席していたのだが、父親でもなく、教師でもなく、警察官でもなく、カウンセラーでもないおじさんと彼は、なんとも言えない、いい雰囲気だった。

彼を更生に導いた大きな要因に、この保護司のおっちゃんの存在があったのは間違いないと思った。

別れ際に私は「どうして保護司になろうと思われたのですか？」と聞いてみた。

「いやぁ、知り合いに頼まれましてね。いやいや引き受けたのですよ」

謙遜でも嘘でもなさそうだった。

すかさず彼が「なんや、ええかげんやなぁおっちゃん。ワハハハ〜」と突っ込みを入れて笑った。

「ほんまやなぁ、ワハハハハ〜」と保護司のおっちゃんも笑った。

こんな素敵な援助者に誰もスポットライトを当てない。

いや、当てないままの方がいいのかも知れない。

本当に力のある、役に立つ援助者というのは、このようにスポットの当たらない、目立たない人なのだろう。

心の底からかっこいいと思った私は、「保護司のおっちゃん」という歌を作った。

目立たない保護司の仕事を目立たせる歌が、一曲くらいあってもいいじゃないか。

あちこちの保護司会で歌わせてもらっているが、自分で作って自分で気に入っている。

講演会＆ライブな日々⑦

古川　秀明

熊本震災復興支援ライブ

兵庫県、宮城県、熊本県と、地震や津波の被災地でがんばっている教師を応援するスポーツ活動に参加させてもらっている。

各県の参加チームがバスケットボールの親善試合をして汗を流し、お互いの苦労を分かち合う。

私はバスケットボールではなく、音楽で参加させてもらっている。

大会歌に曲をつけたり、試合中に音楽の生演奏で盛り上げたりしている。

音楽で参加するチームも各県から何名かおられて、試合終了後はその人達を一緒に歌のライブを披露する。

今回のバスケット会場は旧和泉（なごみ）町立緑小学校の体育館。

知らなかったが、熊本はバスケットボールがとても盛んな土地柄らしい。

大人から子供までバスケットに夢中になる人が多いと聞いた。

緑小学校は数年前に廃校になった小学校だが、立派な体育館が残されており、

ここでもバスケットボールが盛んだったことが伺われる。

今回は教師だけではなく、地元の小学生や中学生も参加してくれた。

みんなバスケットボールが大好きなのだろう。

子供が参加すると、とても盛り上がる。

われわれ音楽隊はバスケをしないのでさぞかし楽だろうと思われるかもしれないが、これがなかなか大変なのだ。

廃校になった小学校なので、なんとかピアノは確保してもらったが、他の機材は何もない。

つまり、音響機材は全部持ち込まなければならない。

楽器、スピーカー、ミキサー、マイクなど、数十点に及ぶ機材を車に乗せ、大阪から九州まで運ばなければならない。

何百キロにもなる機材に、バンドメンバーを車に乗せると、当然燃費は悪くなる。

お盆の大渋滞の時期と重なるので、夜中の出発になる。

片道１０時間以上かかる。

その機材の荷揚げ、荷降ろし作業は結構大変で、まるで運送屋さんみたいな労働となる。

１０時間高速道路を走り、会場では荷降ろし、そして機材のセッティングをしなければならない。

体育館での音響は他の会場よりも手間がかかる。

音の回りがなかなか読めないので、調整にひどく手間取る。

普通はPAと呼ばれる音響専門の人がセッティングするのだが、そんな人を雇える余裕などない。

全て自前でこなさなければならない。

体育館の中の温度は３５度近い。

まるでサウナ風呂のなかで機材をセッティングするのだが、５分も作業をすれば大量の汗がしたたり落ちてくる。

それを１時間くらい続けるのだから、ダイエットには有効だろう。
しかし、熱中症寸前になり、ふらふらしてくる。

そしてライブは一番最期に催される。

観客はついさっきまでバスケをしていた人達だ。

きっとくたくたで、歌など聴く余裕などないと思われる。

しかし、みなさん本当に熱心に聴いてくださる。

踊りだす人や涙を浮かべる人もいる。

そんな光景をみると、ここまでの苦労が全部吹き飛んでしまう。

ボランティアをしながら、こちらが援助されているような気持ちになる。

このボランティアに参加する数日まえに新しいアルバム「家族の歌」が完成した。

熊本でもさっそく購入してくれた人がいてうれしかった。

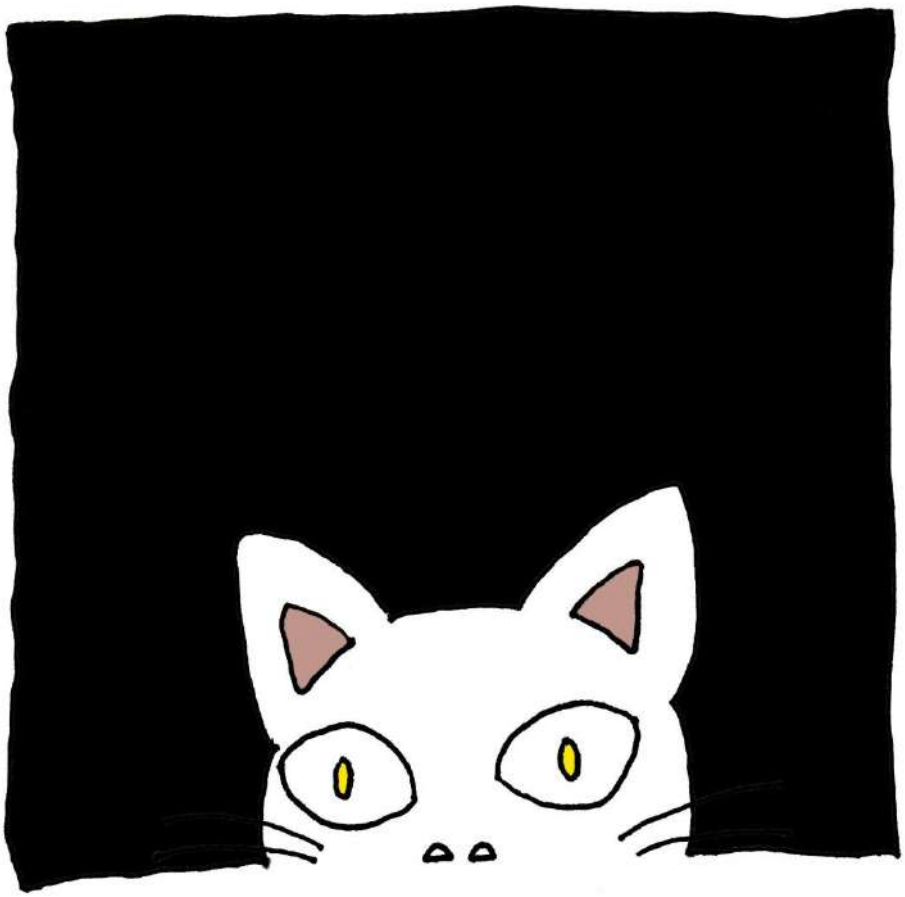
ジャケットのイラストは、４作連続で団 士郎先生にお願いしました。

歌がヒットするまでイラスト料金は要らないという温かいお言葉に涙しながら、貧しい私の音楽活動を支えて下さる御恩にいつか応えたいと思います。

たぶん死ぬまで私の歌が世に出ることはないでしょうから、たいへん心苦しいのですが、次のアルバムのジャケットイラストもお願いします。

なお、このアルバムの一番最後に、過疎に苦しむ笠置町の町おこしに日夜奮闘努力している坂本夫妻の長男長女による「おばあちゃん」という歌が収録されています。

笠置にある坂本家に出向き、笠置の空気も歌といっしょに録音しました。子供たちの歌声と共にセミの声やウグイスの鳴き声も入ってますよ。



アルバムの購入方法

ふるかわひであき講演会＆ライブの会場にてお買い求めください。 通信販売もしています。講演会＆ライブの情報や、通信販売の詳細は HP（tantant.net）をご覧くださいませ。

こころを込めて作ったこのアルバムを一人でも多くの皆様に聴いていただきたいと思います。どうぞみなさまの温かいご厚情を賜りまして、CD ご購入のほどよろしくお願いいたします。

CD に参加していただいたみなさんです。
b. 水田 十夢　木村 健
dr. 田中 良太
v 阿部 京子
vc. 本 勇ニ
ｵｶﾘﾅ 児玉 小枝
15.おばぁちゃん　vo. 坂本 慶榮　坂本 和心
per. vo. cho. 諏訪 和奈
p. vo. cho. 木﨑 香織
ｼﾞｬｹｯﾄｲﾗｽﾄ 団 士郎
ｼﾞｬｹｯﾄ協力 野村 大史
mixing & recording engineer 木村 健
gt. cho. 古川 秀明

全 15 曲入り　定価２５００円（税込）

講演会＆ライブな日々⑨

古川　秀明

宮城県アドベンチャークラブ

アドベンチャークラブというのは「ＮＰＯ石巻広域ソーシャルスキルトレーニングの会」の愛称。

２００３年から宮城県石巻地域で、公共施設や野外活動を中心に、発達障害や不登校などいろいろな生きにくさを持つ子どもたちや青年たちと土日の余暇を楽しく過ごす活動を続けている。

ソーシャルスキルをトレーニングするのだが、そもそもソーシャルスキルとはなんだろう・・・。

アドベンチャークラブの櫻井育子代表は、自分と他人とがうまくやっていくコツだと定義している。

アドベンチャークラブは「共感」「尊重」「自己決定」の三本柱で、コミュニケーションが苦手、問題行動が多いと言われる子どもたちとともに集団での活動を続けている。

自分の好きな事が認められ、楽しく生きることができる。それが自然に、当たり前にできるような居場所をつくること。それをひたすら地味に続けているのがアドベンチャークラブという小さな団体だ。

櫻井代表は「発達はゆっくりでも生きている限り続くもの。障害があってもなくても、自分らしく生きるってことを考え続け、提案していきたいと思う」と語る。

今回はアドベンチャークラブに所属しているメンバーの保護者の皆さんとお話することができた。

あるお母さんは、自分の子どもは重度の自閉症で、どこの団体でも参加を断られて、ここも無理だろうと見学したところ、その場で入会申込書を渡され感動したと話しておられた。

障害の種類や重さに関わらず、広く活動を続けるこのアドベンチャークラブに参加する人が増えて行った。

しかし、２０１１年３月１１日に発生した東日本大震災の時に、多くのメンバーが被災し、やむなく辞めていかれた方も少なからずおられたようだ。

櫻井代表から講演会＆ライブの依頼を頂いて、是非やらせていただきたいと思った。

もともと知的障害者施設に勤めていた私は、櫻井代表に共感するところが多く、やりがいも感じた。

ライブをやるには楽器や多くの機材を片道１０時間近くかけて車で運ばなければならないし、演奏者の宿泊場所の確保も必要だ。

それらのことは、アドベンチャークラブのメンバーが全て解決してくれた。

機材はライブハウスを経営しているメンバーの家族が全部揃えてくださり、運搬やセッティングも忙しい仕事を調整して頂き、手伝ってもらった。

講演とライブは盛況のうちに終わり、うれしい感想をいただき、ＣＤや本もたくさん買っていただいた。

私も満足だったが、一番最後にメンバーの楽器演奏と歌が披露された。

障害を抱えながら、リズムや音程をキープするのはなかなか難しい。
それを多くのボランティアスタッフが年単位の時間をかけて粘り強く指導し、発表することとなった。

演奏能力や歌唱力を競う大会であれば、間違いなく予選落ちだろう。
しかし、一生懸命演奏するメンバーにそんな邪心はかけらもなかった。

ただひたすら楽しそうに、笑顔で演奏してくれた。

その姿に、音楽や歌の本質を見せてもらえたように思った。

リズム、音程、ハーモニー、どれも大切だけれど、一番大切なのはやはり「こころ」なのだ。

メンバーの歌を聴かせてもらって、どこかこざかしい自分の歌を強く恥じた。

メンバーとそのご家族、スタッフのみなさんは、遠くから来てくれたことと、歌っもらえたことの感謝を私に言ってくれた。

だけど、感謝したいのは私の方だ。

私の歌にはまだまだ足りないものがあることを痛感した。
いったい何がどんなふうに足りないのか、見当もつかないのだが、それを探しながらまた歌い続けて行きたい。

施設に勤めた３０年前も、そして今も障害のある人達からいろんなことを教わっている。

その謙虚な気持ちを失っていないことだけは、自分を褒めてやりたい。

講演会＆ライブな日々⑩

古川　秀明

「浄土真宗仏教婦人会」

京都は西本願寺の近くに、浄土真宗本願寺派教務所の「顕道会館」がある。

教務所とは、本願寺直属のいわば事務所にあたる所で、年間を通じて仏教に関する総会や研修などが開催されている。

この会館はいまから 94 年前の大正 12 年（1923 年）の建物で、その年は関東大震災のあった年でもある。

入り口に 3 つのアーチがある、とてもレトロな建物で歴史を感じる。

昨年、浄土真宗仏教婦人会さんから「仏教と心」の講演会＆ライブをこの顕道会館でして欲しいとの依頼があり、今回で 2 度目となる。

仏教とキリスト教は私の長年の研究テーマでもあり、喜んで引き受けさせてもらった。

大学では仏教と浄土真宗を学んでいたので、頭の中ではその教義を理解できたつもりでいた。

しかし、何度も何度も生きることや死ぬことの意味に悩み、人生に苦しみ、路頭に迷うような生き方しかできてない。

苦しむ度にいつも私の前に仏教やキリスト教が現れる。

私が望むから目に付くのか、必要だから目の前に現れる必然なのか、それとも偶然なのか・・・。

まさに摩訶不思議であり、ユングなら「それこそがシンクロニシティだよ」と言ってくれそうなことが次々に起こる。

今回もそんな不思議を感じた。
昨年からの連続なので、同じ話はできない。

どんな話をしようかと思案しているときに、カウンセラーとして相談を聞く中で、連続して「命」を考えざるをえない相談が続いた。

命を考えるのに仏教はとても役に立つ。

信仰はもちろん大切なのだが、仏教哲学も奥が深い。

２５００年も前に命の本質である「生老病死」を見抜いた仏の眼力が、「命」というものを考えるのに役に立たないはずがない。

よし、今回はまさしくその「命」の話をしよう！

そう思い立つとすぐに、家中の経典を引っ張り出し、今までの復習を始めた。

まずは浄土の三部教といわれている「大無量寿経」「観無量寿経」「阿弥陀経」の読み直しだ。

う～ん、忘れていることも多いが、新たな発見もたくさん出てきた。
若い頃には見落としていた言葉が、つぎつぎに落ちてくる。

そこから派生して、「維摩経」「法華経」「般若心経」「華厳経」「観音経」・・・。

まるでネットサーフィンのように仏の言葉が降りてくる。

なんとか１時間で収まるように、しかもわかりやすくまとめた。

改めて学びだすと、まさにそのことに関連した相談が毎日次々に寄せられた。

まるでその相談が来る事を見越したように、様々な仏教経典から言葉が降りていた。

学ぶ、ひらめく、実践する。学ぶ、ひらめく、実践する・・・。

この繰り返しの中でなんと「言葉」と「曲」も降りてきた。

あっと言う間に「御仏の子」という仏教賛歌ができたのは、講演の前日だった。
急いでギターの弾き語りにアレンジして、当日に披露させてもらった。

講演も歌も、とても良かったと言ってもらえた。
前ならその感想に小踊りする気持ちになったのだが、今は違う。

褒められて嬉しくないわけではないが、この歌に「自分」がない。

全てが仏の言葉や旋律を借りているだけである。

聞いている人は、そんなことは知っているかもしれないし、知らないかもしれない。

だけど、講演や歌で本当に何かを感じてくださる人がおられたとしたら、それこそ私の「自力」ではなく仏の「他力」そのものに違いない。

仏の言葉のメッセンジャーとして、自分の命が役立ったのかもしれないという喜びは、私にとって他に勝る。

教会では神様を語り、歌う。お寺では仏様を語り、歌う。

自分が節操のない宗教乞食であることは否定しない。

だけど、自分の信じる宗教だけを守り、人を殺める信心深い人よりも、クリスマスケーキを食べた翌週に初詣に出かける寛容さが好きだ。

若い女優さんが出家したというニュースがメディアを賑わせている。

彼女に何があって出家したのかは知らない。

この国は 20 代の若者が自殺する確率が、他の国と比べて非常に高い。

出家するということは、今までの自分から生まれ変わるということ、つまり、過去の自分と決別して仏の道を歩む新しい人生を歩くということだ。

自殺という形で己の肉体を滅ぼさずに、命ある身体は今のままで、精神だけを新しく生まれ変わらせる。

芸能界というブラック企業の本質に気が付いて、そのレールから降りることはそんなに間違ったことではないと思う。

もちろん、その行為そのものが、こずるい大人達による何かの企てであるかもしれない。

だけど、これだけ若者の自殺者が多いこの国で、「自殺」ではなく「出家」を選択した彼女を応援したい気持ちになった。

「全部、言っちゃうね。」の後は「やっぱり芸能界に戻っちゃった。」になるかも知れないが、それでも生きていて欲しいと思う。

彼女の周囲に、これからも仏の教えを正しく説いてくれる優しい家族や大人がいることを祈りたい。

自分のこれからの講演会とライブの役割を今回改めて気付かせてもらえた。

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

講演会＆ライブな日々⑪

古川　秀明

「大阪府門真市新任教職員研修会」

門真市の新任研修会は毎年１月の第一週に市民プラザで開かれるので、それを自分の仕事始めとしている。

気が付けばもう２０年続けている。

まだ３０代半ばのひよっこカウンセラーが、わかったような顔をして何かを教えていたと思うと恥ずかしい。

２０年間やっていることはずっと同じで、ケース検討会。

学校で困っている事例を家族療法の視点で考え、解決策を考える。

２０年間やり方を変えていない。

心理に限らず対人援助領域ではいつも新しい技法や考え方が持てはやされる。

文科省などの通達で「虐待」「発達障害」「いじめ」「不登校」「性同一性障害」など、その年に取り組むべき項目を指示されると、それに関する専門家が呼ばれる。

そんな中でずっと私を選んでもらえている理由は、同じことを細く長く続けている力があるからだろう。

その力は家族援助に他ならない。

特にこの地域では家族援助の視点が役に立っているようだ。

２０年前初めてこの地域の駅前交差点に立った時、ひとりの中年男性がじっと私の顔を見ていた。

最初は私の近くにいる人を見ているのかと思って周りを見たが、私しかいない。

男性はじっと私の目を見ている。

なんだか居心地の悪くなった私は、男性に向かって「すいません、どこかでお会いしましたでしょうか？」と笑顔で尋ねると、男性は「見ず知らずの他人が俺に話しかけるなや！なんで見ず知らずの他人がしゃべりかけてくんねん！お前あほやろ！話しかけてくんなや！」と大声で叫びながらどこかへ行った。

私は一刻も早く教育委員会に異動願いを出し、もっと静かで落ち着いた地域に配置転換してもらおうと思った。

ある日赴任先の中学で記録を書いていると、窓の向こうにある壁（人の胸の高さくらい）からまたどこかの知らないおじいさんが私をじっと見ていた。

なにげなく顔を上げて窓を見ると、そのおじいさんと目が合ってしまった。

おじいさんは私を手招きした。

私　　：「こんにちは」
おじいさん：「お前いったい誰やねん！」
私の心の声：（うわっ、またこんな人や・・・）
私　　：「私はこの中学のスクールカウンセラーです」
おじいさん：「はぁ？スクール・・・なんやて？」
私　　：「あ、はい、スクールカウンセラーです」
おじいさん：「スクールカウンセラー？ワシはここの中学出身やけど、ワシの時代にはそんな奴おらへんかったぞ。なんやお前怪しいな」
私の心の声：（あんたの方がよっぽど怪しいやん）

私　　：「怪しくありませんよ。ほらこの名札にちゃんとスクールカウンセラー古川秀明て書いてあるでしょ」
おじいさん：「ワシが言うてんのは名札の話しとちゃうねん。お前が怪しいて言うてんねん！」
私の心の声：（うわ、このおじいさん酒臭いわ。まだ午前中やのに・・・）
私　　：「私の何が怪しいんですか？」
おじいさん：「何がて、そんなスクールなんとか言う横文字を言うてワシをたぶらかそうとしてるのが怪しいんや。だいたいそのスクールなんちゃら言うのんは何や？」
私　　：「スクールカウンセリングです。生徒さんや親御さんの、こころのしんどいことの話しを聞かせてもらうのが仕事です」
おじいさん：「へ～、酔狂なことやってるんやな。ご苦労さん」
私　　：「いえいえ、そんな。仕事ですから」
おじいさん：「は？仕事やと？仕事ということは給料もうとんのか？」
私　　：「はい、お給料もらわないと生活できませんから」
おじいさん：「ははぁん、お前カタリやろ！」
私　　：「カタリ？カタリて何ですの？」
おじいさん：「カタリいうのんは人の話を聞いて銭を巻き上げるペテン師のことや。お前みたいに身体を使って働かずに、口先三寸で銭を巻き上げる奴をカタリて言うんじゃ！」
私の心の声：（誰か助けて～～）

ちょうどその時にスクールカウンセリング担当の生徒指導主任A先生が来た。
A先生はおじいさんを見るなり怒鳴り付けた。

Ａ　先　生：「また朝から酒飲んどるな！今日はもうＫ（おじいさんの息子）に言うから覚悟しとけよ！
おじいさん：「ちょっと待ってくれや、俺はこいつがスクールなんたら言うて、俺をごまかそうとするカタリちゃうかとおもて注意してたんや。もし怪しい奴なら孫もここに通っとるから大変やとおもただけや」
Ａ　先　生：「やかましい、そっちの方がよっぽど怪しいわ。さっさと帰れ。二度と古川先生に構うなよ」
おしいさん：「偉そうに言うな！お前も昔は新任やったくせに」
Ａ　先　生：「誰かて始めは新任じゃ！はよ帰れ。今Ｋに電話してもええんやぞ！」
おじいさん：「うっさいボケ！二言目にはＫＫＫＫＫＫ言いやがって、帰ったらええんやろアホンダラＡ」→自転車で帰る。

私は再び一刻も早く教育委員会に異動願いを出し、もっと静かで落ち着いた地域に配置転換してもらおうと思った。

なんて恐ろしい所なんだろうと思いながら、結局２０年もこの地域に関わっている。

どうやらここの土地柄が私の体質に合っていたようだ。

スクールカウンセラーとしての席は若い人に席を譲ったが、社会教育委員と新任研修会の講師や講演会は引き受けている。

最初はあんなに嫌だと思った土地が、いまでは郷土愛に近い感情をもっている。

参加者はみんな自分の子どもと同じくらいの年齢になった。

そのうち「私の親がこの研修会を受けたと言ってました」なんて時代になるかもしれない。

研修会のあとはいつも自作の歌を聴いてもらっている。
もう少しこの地域で役に立つことがあればがんばりたいと思う。

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

講演会＆ライブな日々⑫

古川　秀明

「木陰の物語フォーラム　２０１７」

７月２９日、３０日の二日間、木陰の物語フォーラム２０１７が開催された。

場所は同志社大学継志館。

団先生のイラスト入り案内板。
案内板のサイズはとても小さいが、描かれている絵は団先生のイラストだとすぐに分かるので何より分かりやすかった。

初日のプログラムは団先生の書かれた木陰の物語シリーズの作品からひとつを選び、そのことについて自分の意見を述べたり、フロアとやりとりをしたりする大喜利形式。

壇上で語るのは、宮井研治、菅野道英、早樫一男、岡田隆介、団士郎（敬称略）という錚々たる顔ぶれ。

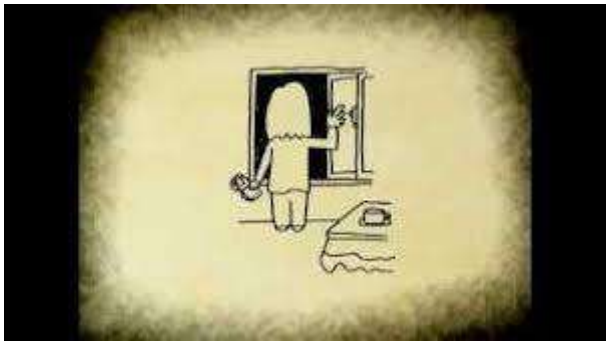
おもしろくないわけがない。

最初に選ばれた作品は「宿題」

木陰の物語のなかでも涙腺破壊ストーリーとして有名だ。

この対人援助マガジンの読者には団先生のファンがたくさんおられるし、木陰の物語に掲載されている「宿題」も知っておられる方がたくさんおられるだろうから内容の説明は省略する。

もし知らない方がおられたら、ユーチューブでも観ることができるので、それを観て欲しい。



何度読み返してもこのコマで泣きそうになってしまう自分がいる。

「固めてしまった説明に自分を閉じ込めるな。自分のために自由だということを忘れるな」という団先生の名言もこころに沁みる。

壇上の先生方が取り上げられる木陰の物語の作品はどれも興味深く、その解説や意見はとても参考になる。

全部参加したかったのだが、私にはこの日の夜に開催される懇親会でライブをするという大役が待っている。

懇親会の会場に機材を搬入し、音響の調整をしなければならないので途中で退席した。

リハーサルでの細かい音の調整ができる音響専門のスタッフがいないので、事前準備にかなり手間取る。

機材のセッティングに１時間。各楽器とヴォーカルの音調整に最低３０分はかかる。

会場の駐車場には他のバンドメンバーが待機してくれていた。エレベーターで大量の機材を運ぶのだが、２機ある会場のエレベーターはとても狭く、４台の台車で２往復しなければならなかった。

会場はホテルの宴会場。ライブはここで夕食を食べながらのディナーショー形式。

ディナーショー形式は過去に何度か経験しているが、とても難しい。
お客さんは歌に退屈すると、すぐに食事にこころを奪われる。
もちろんそれを乗り越える実力があれば問題ないのだが、それもない。
ごたごた考えてもここまできたらもうやり抜くしかない。

午後６時、演奏開始。１曲目からみなさん温かく迎えて下さり、拍手や声援を頂き大盛況。

今回のライブでは曲の紹介にこの本からかなり引用させて頂いた。

この本の執筆者のみなさんの文章は、私の歌に魂を入れて下さった。
自分ひとりで歌っているのではなく、この本の執筆者のみなさんと一緒に歌っているように思えた。

振り返ればあっという間の１時間。
木陰の物語フォーラムに参加されたみなさんから良い夏の思い出を頂いた。

今回の演奏曲

１ブルーシャトー（ジャッキー吉川とブルーコメッツ）
２恋のバカンス（ザ・ピーナッツ）
３野良猫みたいに野良犬みたいに
４あいうえお
５アンガーコントロール
６ひきこもり
７君のさよなら
８私の言葉に
９家族の歌
１０コーリング
１１シーラブズユー（ザ・ビートルズ）

シンガーソングカウンセラー
古川秀明